
鋼殻のレギオス 今日から汚染Life ♪

滅却師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼殻のレギオス 今日から汚染Life♪

【Nコード】

N6557M

【作者名】

滅却師

【あらすじ】

えーっと、あらすじは主役の俺が無能で低能な作者に変わってやることになった。よろしく頼む。この物語はとても簡単に言うとなんて人以外の視点から物語を作ってみたらどうなるかな〜というガキっぽい思考を持った作者の思いつきで生まれた物語だ。更新速度は作者の気まぐれ、物語がどう進むかも作者の気まぐれだ。ま、感想やレビューでも書いてやれば尻尾振ってどんどん書くだろうけどな。…おっと、そろそろ時間だ。俺は戻るとするよ。それとっておくが、これを読むか読まないかは読者のあんたがたの自由だ。強制な

んてしやしない。期待はずれだったからって批判されちゃ、迷惑だからな。それじゃ、物語でまた会おうぜ。あばよ。

おっと、いつの間にかお気に入りがすごい数になってやがるな。主人公の俺も嬉しい限りだ。だけど忘れないでくれよ読者さんたちよ。所詮これはどーしようもない作者の自己満足から出来た小説だ。矛盾点とか、変な部分があっても批判だけはするなよ。そこらへん、ちゃんと覚えといてくれよ。

人生、それは唐突なもの

今日の収穫は……雌性体が一、雄性体が三、幼生体が約五〇くらいか。

『うん、今日はなかなか大量だな』

特に雌性体が狩れたのはラッキーだったな。雄性体も美味いんだが、どこか肉質が固いんだよな。雌性体は逆に肉質が柔らかいから、どっちかと言えばこっちの方が好みだな。幼生体はデザートってことにするか。

『そんじゃま、いただくとするか』

短い手を何とか合わせて合掌する。そして手で持って一匹一匹丁寧に、骨も残さずに食べていく。

一応言っておくが、別に頭がおかしくなって汚染獣食べてるわけじゃないぞ。

確かに野菜や牛肉とか、そんなもんも食いたいとは思っているが今じゃそんなことできやしない。

——もう俺、人間じゃないからな。

○

もう一年くらい前（ここら辺は記憶が曖昧でよく覚えていない）になるのか。

好きだった『鋼殻のレギオス』の小説の最新刊を手にしていた俺はその時馬鹿みたいにはしゃいでいた。そりやもう思い出すだけで顔から火が出そうなくらいな。そこで、はしゃいだまま俺は家に帰ろうとしたんだが、何でか知らないがブレーキが壊れていて、坂道で止まることができずに横から来たMAXスピードの車に轢き殺された、はずだった。

それがどういうわけか、目が覚めてみれば汚染獣になっていたんだよな。こう言うのを俗に言うトリップもしくは転生ってやつなんだろうな。

最初の頃はかなりショックだったな。だいたいトリップか転生って言えば普通人の形だろ！　なのに何が悲しくてこんなやられキアラにも等しい存在の汚染獣にならにやいかんのだ！　って感じてあたりかまわず叫んでたな。

だけど、今となつてはこの体も便利だと分かった。汚染された空気の中でも普通に呼吸できるし、行動も自由にできる。都市と遭遇しても攻撃さえしなければ武者たちは攻撃しようとしなから楽にスルーできる。もともと人を食おうとも思っていないからな。

そんなこんなでこの体の生活も悪くないだろう程度の心構えになつてきた。それでも未だになれないことが一つあるけど、それはまた今度の機会にしよう。

そして、俺には目標がある。

まず第一に老性体になることだ。今の俺は雄性体で大体五期ぐらいだと思うからもうそろそろ脱皮の時期だと思う。雌性体になる気はサラサラないから、まずはこれが第一目標だ。

二つ目は学園都市ツエル二との遭遇だ。やっぱりこんなことになったんだから、せめてレイフォンたちに会ってみたいからな。ファンとしての夢だ。

そして三つ目はかなり重要だ。それは……槍殻都市グレンダンと遭遇しないことだ。これに関しては言う必要はないだろ。分かりきったことだ。

とりあえずの目標はこの三つだ。多くを望んでも叶わないことが多いからな。捕らぬ狸の皮算用ってことわざもあるからな。

『ごちそうさまでした、っと』

そんなことを考えているといつの間にか飯が全部なくなっていた。考えながら食ってたんだな俺。

『ふう、さてと、食後の腹ごなしと行きますか』

俺は胡坐を解いて立ちあがる。そして背中を縮めておいた羽を思いつき伸ばし、羽ばたいた。さて、今日はどこへ行ってみようかな。できればグレンダンには会わないことを願おう。

そんなことを思いながら、今日も気ままに空を飛ぶ俺だった。

探検、それは常に新しいものを見つけるもの

『おーおー、こりやまた派手にぶっ壊れてんなあ〜』

この前からさらに数日たった今日。暇を持て余した俺は探検に出ることにした。

つつてもこんな荒野ばかりの世界じゃあ、草一本見つけることだ
つて出来ない。運よく見つけても大部分は自律型移動都市レギオスがいいと
こだ。へたすりゃ何も見つからずに帰ることにだってなる。

そう思いながらもやっぱり探検に出かけた俺。そして、見つけた。
——汚染獣に襲撃されてそう経ってはいないだろう移動都市を。

大地を踏みつけるはずの巨大な多足は膝を屈し、移動する気配は
ない。建物の大部分は爪が牙でえぐり取られるように破壊されている。
外縁部は……惨劇だな。人の死体がごろごろと落ちこちている。
見慣れないものを見てしまい、吐き気が襲ってくる。だがそれを
何とかこらえ、出来るだけ死体が少ない外縁部へと降り立った。都
市内に入る瞬間、空気が変わった気がした。おそらくエアフィルタ
ーはまだ生きているんだろう。

『……ひでえな、ホント』

さっきまでの軽口が、もう重くなっている。まだ人間らしい感情
が残っている証拠だ。

俺は都市の中央の方を見た。ほとんどの都市は中央の塔に旗を掲
げている。

『確か、あの紋章は……ベリツェンだったか？』

うる覚えの知識で思い出すが、思い出せたのは都市の名だけだっ

た。それ以外は点で覚えていない。それほど重要な都市ではないということだろう。

『これ以上の長居は無用か』

外の汚染された空気から漂ってくる微量な匂いを俺は感知していた。これは人にはわからない、汚染獣独特のにおいだ。匂いの質から言って、大体雄性体第3期かそこらだろう。別に負ける気はしないが、無駄な戦闘は極力避けるのが俺の生き方だ。

俺は飛び立とうと翼を広げる。

その時、汚染獣になって強化された聴力が何か動く音を捉えた。バツと音のした方に振りかえり、牙をむく。もしかしたらまだ汚染獣が残っていたのかもしれない。だとしたら戦闘は避けられないな。そう思ったが、違っていた。

音のした方へと歩みよつていくと、其処にあったのは何かを守るうと積み重なった30位の男女の死体だった。そして、両親に守られるように、汚染物質遮断スーツを着た、少年と少女が気を失っていた。

それだけで、悟った。きっとこの二人は少年と少女の親で、せめてこの少年たちだけでも守ろうとスーツを着させ、そして我が身を犠牲にしてこの子供を守ったのだと。

『おいおい、何の冗談だよ』

見たところ二人は目を覚ましていない。おそらく肉体が反射的に上に乗っていた重いものをどかさうとしたんだろう。そしてその音に俺が気付いた。俺が都市から離れようとした、絶妙なタイミングに。

偶然にしちゃ、出来過ぎてるよなあ。

『俺に、守れつてのか？ こいつらを』

俺は子供を見た。おそらく両親は武芸者。だとすればこの二人も武芸者になる資格が備わっているということだ。だが、今助けたとしても、都市の食料は残っていないさそうだから結局は餓死で死ぬ。助けなくても、そろそろ来るはずの汚染獣に食い殺される。どっちみちバットエンドだな。

『ハッ、なら選択は一つだけか』

俺は手を伸ばし、二人を抱えた。

俺はまだ人間だ。汚染獣じゃない。だからこの二人を生かす。たとえ、将来この二人が俺の敵になるとしてもだ。助ける理由なんて、それだけで十分だ。

『だとすれば、次の行き先はやっぱりあそこか』

一瞬だけ嗅げた、汚染獣とはまた違う匂い。こっちは都市独特のにおいだった。この近くに都市があるのならば、この二人を其処に届けるのが一番だろう。襲われるかもしれないけど……ま、まあ人間二人渡せば案外すんなり逃がしてくれるかもしれないしな。

『んじゃま、行くとするか！』

二人の命を守るため、汚れた空に翼を広げ飛び立つ。

これがのちに物語に大きな影響を与えることは、まだ知る由もなかった。

頼みごと、それは一つ間違えば脅しになるもの

頭の片隅で、可能性としては考えていた。あくまで、可能性の話だ。0・001%くらいはあるかもしれないとは考えていた。

無計画だった俺自身の行動を呪う。

（なんでこんな単純だったんだ俺よ！ もう少し考えて動くとかはできないのか俺よ！ いやでもこの子たちの命を一刻も早く助けようと急いでいたから……）

だぁー！！ と頭を掻き毟りたい。だが両手がふさがっているためそれはできない。一体この衝動をどこにぶつければいいんだ！！

『ホント……どうしょ……』

俺は眼下で地響きを立てながら動く、自律型移動都市を眺めながら深く考えた。

大地を踏みしめて行くそれは……俺もよく知る学園都市ツエル二だった。

いまさらだが、ベリツェンで鋼殻のレギオスで一番最初に出てきた都市で初っ端やられてた都市じゃん。それに確かそのそばを二ナたちが乗ったバスが通ってたっけ。

『なんでこんな重要な事を思い出さなかったんだ俺はあつ！！』

勝手に悶絶する俺。人間の姿だったら確実に白い目で見られてそうだな、って、今はそんなこと関係ない！ 重要なのはどうするべきかだ！

いやまあ、行くべきなんだろうけどさ、でも出来ればここには寄

りたくない！　なぜかと言うと、今行けばあの超絶腹黒の性悪生徒会長につかまって、あれやこれやの実験台にされそうで恐ろしいからだ

！　いや、実験台ならまだいいかもしれない。もしかしたら解剖なんて恐ろしい事にも発展しかねん。そう言うことを笑顔でやりかねない男であれば！！　俺の予想ではだがな……。

四苦八苦しながら少ない脳味噌を絞り絞って考える。すると、視界の端を何かが横切った。何だと思い、目で追って確かめる。そして、固まった。

『……俺、バ力だな』

素直な感想しかでない。何故かと言うと、四方八方見覚え聞き覚えのある、発光している物体に覆い尽くされていたからだ。これだけの数の念威に気付かない俺って……　本当にどっか抜けてるんだな、俺。

だが別に念威なんてどうってことない。これ全部を一斉に爆破させたとしても、よくて甲殻部分がちよつと焦げる程度だろうな。もしくはちよつと欠ける程度。さすがにやるとは思えないが、こっちは子供抱えてるから爆破されるとちよつと困るよなあ。

『はあ、しかたない、か』

これ以上ここでこうしていてもしょうがない。降りるとするか。嫌な予感がしつつも、自律型移動都市目がけてゆっくりと降下を開始する。降下していくにつれ、外縁部にかなりの数の武者たちがいることが分かった。あとなんかでつかい砲台がこっちに向けられている。多分、あれが劉羅砲ってやつなんだろうな。あれはまともにも食らったら、さすがにやばいそうだな。俺はグツと子供を内側に抱え込む。

エアフィルターを超えると、空気が瞬時に変わった。もちろん外の汚染された空気とこっちの洗浄された空気では違いがあるだろうけど、そう言うものじゃない。ピリピリとしていて、針で突けば簡単にほじけてしまいそうな、戦場のような空気だ。

（当たり前、か……）

今の俺は汚染獣。あつちはこの薄汚れた大地で懸命に生きようとしている人間。簡単に言えば、喰う側と喰われる側。必死になるのも道理か。用だけ伝えてさっさと失せるか。

俺は深呼吸をして、息を整える。俺の行動に武者たちが一斉に武器を構える。緊迫した重苦しい空気が流れる。そして、

「この都市の長を呼べ。話がしたい」

俺の言葉と同時に、周りに居た武者たちすべての動きが止まった。まるで目の前の事実を受け止められないかのように。

……予想はしていたが正直、ここまで驚くとは思ってなかったな。ただどここのまま止まってもらって話が進まないな。さっさとここから出ていきたいし。

「もう一度言う。この都市の長をここに連れてこい。話がある」

もう一度言うと、ようやく周りの武者たちが現実を受け入れたのか、ざわつきだす。

しかしなれない言葉で話すつてのは疲れるもんだなあ。長とか言ったことないし、聞いたこともないしな。

（……いまさらだけど、今の会長ってカリアンなのか？ あの腹黒ならありえないこともないだろうけどなあ）

そんな若干どうでもいい事を10分くらい考えていると、ざわついていた武芸者たちが静まる。そして、道を開けるように左右に分かれて行く。その道を歩いてくるものが二人。片方は武芸者だが、どちらも見覚えのある二人だ。

ゆっくりと歩いてくる、カリアン・ロスとヴァンゼ・ハルデイ。俺の前で歩を止めると、ゆっくりと見上げてきた。

「ほお、お前がこの都市の長か？　ずいぶん若い気もするが？」
「いえ、現会長はここに来られない故、私が代役としてここに来ました。どうかご無礼をお許してください」

ふっ、代役か。おおかたビビっただけだろうけど、まあいい。こいつの方が話がしやすい。

「……いいだろう。貴様はそこらに居る小粒な武芸者たちより、よっぽど肝が据わっていそうだ」

「褒め言葉として、お受けいたしましょう。して、話とは？」
「くく、そう急かすな。何も貴様らを捕って食うわけではない」

俺は体勢を崩し、ゆっくりと腰を下ろした。さすがにこの体重を支えるのはまだ慣れないな。

俺の行動にカリアンは動じることも驚く様子もない。

「ふう……すまないな。この体にまだ慣れていないものでね。動くのに一苦労だ」

「この体、とは？」

カリアンの目が怪しく光った、気がした。本当に目敏い人だ。元いた世界にこの人がいたら、総理大臣にでもなってるんじゃないのか、

この人？

俺はカリアンの言葉を無視して、話を進める。

「此度、この都市に来たのは頼みあつてのことだ。しかも、貴様らにとつて利益のあるな」

「ほお、それはぜひとも聞いてみたいものです」

「ああ、その頼みとは……これだ」

俺は周りから見えないように抱えていた埃だらけの二人の子供を、ゆっくりと地面に下ろした。さすがにこのことにはカリアンやヴァンゼ、周りの武芸者たちも目を見張った。

「貴様あつ！ この子供たちはいったい何だ！！」

ヴァンゼが怒りのままに怒号を発す。周りの武芸者たちもそれに呼応するように武器を構えてきた。

今にも飛びかかってきそうな形相のヴァンゼを、カリアンは片手で制す。さすがは次期会長の器。行動が速いな。

「貴様たちの怒りは最もだろう。同族がこのような姿になっていれば、俺とて怒りを覚えよう。だが、この子たちはまだ生きている。これこそが、貴様たちに対する頼みなのだ」

「これが、頼みだと……？」

「そうだ、武芸者よ。この二人は俺が見つけた。すでに他の汚染獣たちに襲われ、滅びつつある都市でこの二人のみが生き残っていた。故に、ここに連れてきた。命の灯が消えぬうちにな」

「……あなたは私たちに利益があると言いましたね。その利益とは？」

「この二人は貴様らにとっての守護者、つまり武芸者となる資格を持った二人だ。この世界にとって、武芸者は貴様らにとってなくて

はならない存在。一人でも多くの武芸者を確保しておきたいはずだ」

カリアンが顎に手を当て考えはじめる。こいつは都市に対する利益を第一に考えるはずだ。なら、この交渉に応じないわけがない。

「……分かりました。この二人は私たちが保護します」

やっぱりな。喰いついてきた。

「物分かりがよくて助かる。だがな」

俺は言ったん言葉を区切り、鋭いナイフのような齒をぎらつかせ、全身から怒気を発する。それを感じたヴァンゼはカリアンをかばうように後ろに下がらせる。

「もしこの二人を疎外したり、非道な行いをしてみる。その時は貴様らを俺の晩餐にしてやろう。よく覚えておくことだな……」

「……承知しました」

汗一つ流さず、逆にこっちを見据えたまま承諾した「。

「ならよい。では、そろそろここから失せるとしよう。聞くべきことはもうないな？」

「では最後に、あなたには個体名などがありますか？」

「個体名……名のことか………」

カリアンに言われ、そう言えばこっちでの名前なんてなかったことに気付く。汚染獣として生きていく上で、名前なんて必要ないと思っていたんだが、まさかこんな所で聞かれるとはな、思ってもみなかった。ま、元いた世界の名前でもいいか。

「そうだな……シン、とても呼んでくれ」

「分かりました。ではシン。この子たちは、私が責任を持つてお預かりいたします」

「ああ、頼んだぞ」

俺は翼を広げ、羽ばたく。土埃が舞い、武芸者たちは腕や手で顔を覆う。

ゆっくりと俺の巨体が空に向かって上がっていく。そのままエアフィルターを抜け、汚染された空へと登っていく。

最初はどのようなものと冷や冷やしたが、案外すんなり話を通つてよかったわ。カリアンとヴァンゼに保護されときゃ、なんとか大丈夫だろうな。

二人の心配をしつつ、俺はそのままどこかに行こうとした。

けたたましい音のサイレンが都市の外にまで響き渡ってきた。

『……おいおい、マジですか？』

どんだけ俺って運が無いんだ？ 俺神様に嫌われるようなことしたっけなあ。

知っている。この音は、都市に住む電子精霊の悲鳴だ。そして、それが意味するもの。俺の目にもそれが見えてきた。

大地のその先、地面を這うように都市へと侵攻してくるそれは――

――大量の汚染獣だった。

頼みごと、それは一つ間違えば脅しになるもの（後書き）

時間軸的にあっているかがとてもなく心配になってきました。
次の回ではツエル二との共闘を予定しております。

戦闘シーン。うまく書けるか分かりませんが、頑張ります。

戦い、それは多くの意味を持つもの

『……一体どういうことだよ？』

俺は迫りくる汚染獣の群れを前に、呆然とつぶやいた。

まだかなり距離はあるが、あと20分くらいで自律型移動都市と接触するだろう。数は目視確認できるだけでも雄性体が4体。周りにはかなりの数の点が見える。あれはおそらく幼生体だろう。こちらはかなり数の数がある。悪く見積もっても50は超える。

だが、そんなことはどうでもよかった。俺が驚いているのは、ツエルニが汚染獣と接触するタイミングだ。俺が知る物語では、ツエルニが汚染獣と接触するのは、おそらくだが約2年後。つまりレイフォンが都市に来てからのことだ。まだこの時期は汚染獣と接触するはずがない！

『……俺のせいってか、クソッ！』

考える限りの可能性があるとするれば、俺という存在のせいだ。

実際、俺はここに居るべきでない存在。つまりイレギュラーな存在。ベリツェンでも、死んでいたであろう二人の子供を助け、さらにツエルニとも接触した。

交わってはいけない歴史に、俺は片足を突っ込んでしまった。故に、歴史もそれに適応しようとして形を変えようとしているのかもしれない。その形がこれというわけか。

『って、悩んでも仕方ねえ！ あいつら逃がさねえとやばい！』

今のツエルニにあの数と戦う戦力なんて皆無のはずだ！ 最悪ここで滅びちまう！ それだけは何としても回避させないと、後々に

なつて支障が出る！

俺は急旋回し、落ちるような勢いでツエル二に降りる。まだ外縁部に残っていた武芸者たちは驚いているが、そんなこと気にしちゃいけない。

「ツエル二！ 聞こえるかあ！ 今すぐ全速力でこっから逃げろお！！ 俺が時間を稼いでやる！」

俺は腹の底から、聞いているかどうか分からない都市の意識に向かつて、怒鳴るように声をあげた。

まさかの行動に呆然としている武芸者たち。俺はそいつらを睨みつけるような勢いでそちらを向く。

「お前らもこんなところにいないで、さっさと失せろ！ 死にたいのか！」

あらん限りの声で怒鳴る。だが、武芸者たちは動こうとしない。その行動が、俺をイラつかせる。

そして、もう一度怒鳴ろうとした時、目の前に念威が降り立つ。

『シン、悪いが僕たちに逃げるといふ選択肢はないんだよ』

そこから聞こえたのはカリアンの声だった。警報が鳴ったと同時に、安全な場所に避難して、念威を通してこっちに話しかけているのだろう。

「逃げる選択がないだと？ ふざけるなっ！ お前たちが思っているほど汚染獣は甘くない！ それに数だって、熟練の武芸者でも相手にできないほどだ！！ こんな素人に毛が一本生えた程度の奴らが、勝てるわけないだろう！！ その程度も分からないのか、お前

らは！」

『それでも、だよ。それが武芸者の使命であり、武芸者たちから守られる私たちの運命なんだよ』

俺には、カリアンの言葉が分からなかった。

運命？ 使命？ そんなものに左右される世界なんて、おかしすぎる。狂っているとした言いようがない。

頭の中がごちゃまぜになって、考えるのが次第に面倒になってきた。

「……もう、面倒だ」

『シン？』

「考えるのはもうやめだ。お前らはお前らで勝手にやってる。俺は俺でやるだけ、だっ！」

カリアンに次の言葉を言わせず、前にあつた念威をバクリと食べてしまう。ゴリツ、と、感覚的には石を噛んだ感触だったが、バラバラに噛み砕き飲み込んだ。

啞然とする武芸者たちを無視し、飛ぶ。と同時に、ツエル二の移動する方向が変わった。

聞いてくれた。電子精霊が、俺の言葉を。

『……そいつらを頼んだぜ、ツエル二』

汚染された風に流されてしまうほど、小さな声で呟く。

そして、方向転換し汚染獣の群れを睨みつける。距離がかなり縮まっている。無駄話が長かったな、こりや。

『さあて、こっから先は——』

全身が火照る。牙が疼き、爪が鋭利になっていく。尾は俺の意思とは関係なく、鞭のようにしなり、獲物を待ちわびている。

やっぱり俺も汚染獣。餌を目の前にとすると、体が勝手に反応する。喰らえと、潰せ、と。

『——無礼講といこうじゃねえか!!』

雄叫びが、汚染された大地を駆け巡る。声は振動となり、大気を震わせた。砂塵が一瞬吹き飛び、視界が良くなる。だが、それも一瞬のこと。しかし俺の眼は、獲物を確実に捉えていた。

翼で空気を叩くように羽ばたく。いつもでは出さない速度で地面すれすれを滑空する。

『かあああああつ!!』

そのまま幼生体の群れを吹き飛ばす。地面すれすれを飛ぶことで出来た突風と衝撃波が、いとも簡単に幼生体を吹き飛ばす。俺はそのまま体をひねり、空中を飛んでいた雄性体の一体を尻尾で叩き落とす。メキッ、とひびが入る音と共に雄性体が地面に激突。ものすごい砂埃が舞う。

群れの幼生体や雄性体の一体に異変が起きたことで、他の雄性体たちがこつちを向く。さつき尻尾で叩き落とした雄性体も立ち上がる。体勢が変わったおかげで、尻尾の威力が落ちてたのか。

周りを囲む雄性体たちが唸り始める。飯の邪魔をしたものに怒りを覚えたのかどうかは俺には分からない。分かる必要が無い。

これから、俺の飯になるような奴らのことなど、知る必要が無い。

『さあ、来いよっ！ お前らまとめて、俺が喰い尽してやらあつ!!』

武器に頼ることのない、原始の本能のみが頼りとなる、獣と獣の喰らい合いが始まる。

戦い、それは多くの意味を持つもの（後書き）

主人公『 人じゃないときの声状態

「 人の声状態

今度はちょっと視点を変えたいと思いますが、もしかしたら変えないかもしれません。

同族、それは分かりあえる可能性を持った存在

『おおあああつ！！』

俺は雄叫びと共に大地を駆ける。一步踏み出すごとに地面が揺れ、乾いた大地にひびを入れる。

狙いは正面にいる二匹。

最後の二歩。一步は思いつきり飛ぶ。そして最後の一步、相手の目の前で踏みとどまる。そして走った勢いを尾に乗せ、振りぬく。鋼鉄に匹敵するほどの強度を持った尾が、鞭のようにしなり正面に居る二体のうちの一体の首に直撃する。尻尾を通して脳に、ボギツと骨を粉碎する感覚が伝わる。

動けなくなつた一体を無視し、次を潰そうと動く。

『いつつ！？』

脇腹と背中に何かが突き立つような痛みが走る。痛みにとらなから見れば、後ろに居た汚染獣二匹が背中と脇腹に喰らいついていた。牙は甲殻を貫通し、肉にザックリと刺さっている。

『な、めんなあああつ！』

俺は尾を使って背中に噛みついていてる奴の首に巻きつけ、締め上げる。脇腹に噛みついていてる奴は手を伸ばし、頭を思いつきりつかみ、目に爪を突き立てた。

脇腹に噛みついていてた奴は痛みからか、悲鳴に似た鳴き声を上げる。その状態のまま、俺は手を離すと同時に頭に喰い付く。そして、ひと思いにグチャと噛みつぶす。

口いっぱい血と肉が弾けるように広がる。

その味は——あまりにも美味すぎた。立った一日食べていないだけで、汚染獣がこんなにも美味く感じれるとは知らなかった。

もっと喰いたい。俺は戦いを半ば忘れ、背中に噛みついていてる奴に視線を向けた。

背中に噛みついていた奴も、首を絞められて空気を吸うことができずに牙を離した。俺は尾を巻きつけたまま、力の限り汚染獣ごと空中に振り上げ、地面に叩きつける。

ドオン、ドオン、と一回叩きつけるごとに汚染獣の体のあちこちにひびが入る。首に巻きつけている尻尾も徐々にきつくなっていき、数回たたきつけたただけであっけなく死んだ。

死んだ汚染獣をそのまま口元に運び、一番柔らかい首の部分の肉に牙を当て、食いちぎる。

鮮血が顔一杯に降りかかる。だがそれすら今の俺にとっては、最高級のワインを浴びているようにしか感じれなかった。

口の中の肉を飲み込み、顔のかかった血を舌で拭う。

(もっと、もっともっともっと喰いたい!!)

徐々に思考が変わっていく。戦うという思考から喰うという思考に。

俺は喉を食いちぎったそれを捨て、最後に残った一匹の方を向いた。

最後に残った一匹は、勝ち目がないと判断したのか俺が振り向いた瞬間に飛んで逃げようとする。だが、目の前のエサを逃がしてやれるほど俺は優しくはない。

『逃がすか……』

俺は逃げようとするエサの足に尻尾を巻きつけ、地面に引きずり落とす。

それでもなお逃げようとするエサ。地面でバタバタあがく姿がともうつとおしい。

俺は胴体に足を乗せ、徐々に重量をかけていく。そして両方の翼を根元から掴み、グツと引っ張った。

ブチブチと糸の束を引きちぎったような音が耳に届く。両手には胴体から取れた翼。俺はそれをポイツ、とそこらへんに投げ捨てる。翼が失ってもなお、逃げようと足の下で暴れる汚染獣。俺は無感動にそいつを眺めながら、もう片方の足を振り上げる。

そして、暴れる汚染獣の頭に足の裏を合わせる。汚染獣と、一瞬目が合う。汚染獣の瞳は感情のかけらすらうかがえないほど、無感動なものだった。

俺は同情することもなく、そのまま脚を振り下ろした。甲殻を壊す感触と肉を潰す感触。それがほぼ同時に感じる。ゆっくりと足を退かせば、そこには汚染獣だったものがあるだけ。

全ての汚染獣を倒し、周りには静寂のみが残る。

戦っていて、最高潮となっていたテンションも少しずつ冷めていく。

『……やっぱし、人じゃ無くなっちまったんだなあ……俺』

俺は最初、都市を汚染獣から守るために戦おうとしていた。なのに、さっきの俺はどうだ？ 戦いの中で目的を忘れ、自分の欲求を満たすただけに汚染獣を喰らっていた。こんなもの、人のすべきことじゃない。獣のすることだ。

俺はそれをしてしまった。きっと俺は今、人と獣の中間部分に居るんだろう。俺はそんな、とても危うい存在。

『……行っつ』

これ以上、ここにいるのは駄目だ。今度は都市を危険に巻きこん

でしまいそうで、怖い。

俺はさっきと一変し、弱弱しく翼を広げる。ゆつくりと地面から脚が離れていく。最後に、死んだ汚染獣たちの方に向き直り、

『……ゴメン』

そう呟く。

そのまま俺は都市から離れるように空を飛ぶ。いつか、ちゃんと自分がコントロール出来るようになったらまたツエルニに来よう。そう、心に誓って。

同族、それは分かりあえる可能性を持った存在（後書き）

疲れました。

キャラ紹介（前書き）

PV20000越え！ ユニーク5000越え！ 見てくれる人が
いる限り書いていきます！！

キャラ紹介

主人公 シン

性別 男（雄性体）

精神年齢 17そこら

外見 灰色に近い白色の甲殻。全体的な外見はハルペーに似ているが、手は鋭い爪が生えている5本指の手。脚は大木のように太く、3つのつめで大地に立っている。大きさもハルペーとほぼ同じくらい。

性格 気まぐれで気分屋な性格。喜怒哀楽はしっかりあり、ブチぎれると人間に対しては言葉責め。汚染獣に対しては実力行使。狼面衆はいたぶる。

誰かのために戦うことも多々あり、私的理由での破壊行動はほぼなし。ただし野生のスイッチが入ると止まらない。人間を汚染獣から守るとき、人間側から攻撃されてもけつして反撃はしない。

基本的に人間は好き。だけど自分は汚染獣だからと、どこか一線を引いている。

原作の知識を持つてはいるが、こつち（レギオスの世界）に来てからおぼろげにしか思い出せない。原作展開をぶち壊すことも平気でやる。ていうかもうやっている。

原作キャラで一番好きなのはニーナで、一番嫌いなのはイグナシスに加担する全て。

学園都市ツエルニは都市の中で一番気に入っているため、定期的に様子を見るようにしている。ただしグレンダンは視界に入つて瞬間、風のごとく逃げる。

戦闘技術はかなりのもの。老性体第一期くらいなら、ほぼ同等に殺りあえる。天剣授受者に関しては接触したことが無いので不明。

キャラ紹介（後書き）

ざっくりと主人公を説明するとこんな感じです。

なお、今考えている展開で行くと、シンに仲間を作ろうと思っています。さすがに独りぼっちだと、なにかとかわいそうなので。

なので、これを読んでいる読者さまから、アイデアをいただきたいと思っていますが、よろしいでしょうか？

もしよろしければ、メールにて作者に送ってください。

募集要項としては、

？ 仲間は汚染獣でも人間でも可。人型汚染獣とかでもいいです。

？ チートや最強は不可。

？ 男女の性別、どんな外見か、年齢、性格等をザックリとでいいので書いてください。本格的に書いてもよろしいです。

いくつ採用するかは未定です。複数あれば、その中から選んでいきます。

それでは、ご協力お待ちしております。

悩み、それは誰にでもあるものだ（前書き）

お気に入り登録120件……だと？

まさか……まさかこんなにこの小説を読んでいる人がいるなんて、作者は感激しすぎて涙が止まりません（嬉し泣き）

皆さんの期待に添えられるよう、これからもがんばって書いていこうと思います！

読者のみなさんも、これからもよろしく願います！

悩み、それは誰にでもあるものだ

『さて、どうするか……（バリバリバリバリ）』

俺は残り少ない幼性体を食いながら、あることに困っていた。

ツエルニから去ってはや数カ月。今俺がいる場所は、かつては人がにぎわい生きていた都市だ。だが今は見る影もなくなり、エアフィルターも無くなった、ただの廃墟と化している。

不謹慎ながら、ここ最近ではここをねぐらとしている俺。中心部を歩き、外からだただの廃墟と化した都市にしか見えないようにした。滅多に人は来ないだろうけど、念のためだ。

話を戻そう。今俺が困っていることは二つある。

困っていることは食料に関してだ。ここ一週間、ろくなものを食べていない。食ったものと言えば、せいぜいよくて今ある幼性体がいいとこだ。三日前なんて土食って飢えを満たしたしな。

何せこの巨体だ。ちょこつと動くだけでも人間の数倍のカロリーを消費している。だから食う量もバカにならない。幼性体なんて、幾ら食っても腹の足しにもならん。

俺は尻尾を伸ばして幼性体を捕ろうとしたが、尻尾は空を切る。首をひねって幼性体を積み重ねておいた方を見ると、一匹もいなかった。無意識のうちに食い尽してしまったらしい。

むむ、と唸る。やばいな、最後の食料がこれで尽きてしまった。

これから先、もしも食料がとれないなんて事態が起こったら確実に餓死する。100%餓死するな。

『なんか無かったかな……』

俺は辺りを見回す。しかし視界に入るものは瓦礫ばかりで食えそうなものなんて何もない。ためしに瓦礫を退かして探してみた。

そこでとあるものが出てきた。

「ん？ これって……^{ダイト}錬金鋼か？」

指先でつまめる程度の大きさの棒状物質、おそらく錬金鋼だと思う物が瓦礫の下から出てきた。さらに瓦礫の下を探ってみると、出るわ出るわ。合計で30本くらいは錬金鋼が出てきた。

しかし、今の俺に必要なのはこんな無機物じゃない！ 腹にたまる有機物だ！

俺は掘り起こした錬金鋼をいったんどかし、他の場所を探る。

1時間後

「……結局、探して出てきたのはこれだけ、か………」

最終的に見つかった物はボロ布や鉄くず、錬金鋼のみだった。結果、食えるものが一つもない。神様はよほど俺のことが嫌いらしいな。

「……いや、まだ諦めるのには早いかな」

そうだな。今あるものは人間だった時では食えなかった物ばかり。だが今の俺は人間じゃない。そう、それはもしかしたらこの中に食えるものがあるかもしれない可能性があるということだ！

つーわけで、さっそく食ってみることにしよう。

「まずはこのぼろ布か……いざっ！」

勢いのまま、口にボロ布を放り込む。うむ、ぶちぶちと布の繊維を噛みちぎるこの触感。ごわごわとした口触り。若干付いたドロやごみが、また変な風味を出している。そして喉を通るこの不快感以外の何物でもない物。

『評価、食えたもんじゃない！』

最初からなんとなく無理だろうとは思ってたけど、やっぱり無理だったか。

というわけで次、コンクリが付いた鉄くず。

これもさっきと同じように口に放り込み、噛み砕こうと思いつきり噛んだ。

ドスッ！ ペッ！

『……………（ピクピク）』

俺は鉄くずを瞬時に吐き出し、口をおさえる。い、今、口の中に突き立った！ 鉄くずが思いつきり突き刺さった！

痛みに悶えながら舌で口の中を探り、鉄くずが刺さった部分をちよんちよんと突いてみる。血の味はしたもの、其処まで酷い怪我ではなさそうだ。よかった。

『さ、さてと、最後に残ったのは……………これか』

俺は最後に残った鍊金鋼をつまむ。まさか、鍊金鋼を食う日が来ようとはな。

俺はしばらく鍊金鋼とにらめっこしながら、意を決して口に放り込む。

バリバリバリゴリ、ゴックン。

『……食えなくは、ないか……』

味っ気が無かったものの、布よりはまだ食える。まあ多少歯ごたえがありすぎる気もするが、食えることは食えるな。カロリーは摂取できそうにないけど。

『しかたない、明日の狩りまでこれで凌ぐしかないか』

俺は誰に言うでもなく、独り言をつぶやきながらストックしておいた鍊金鋼をおつまみ感覚で次々と口に放り込み、その日の空腹をしのぐのだった。

次の日

『なんじゃこりゃあああつー!』

何でか尻尾が剣みたいになって、しかも赤色の金属になっていました。やっぱりこの世界は不思議だと、再確認できた瞬間だった。

悩み、それは誰にでもあるものだ（後書き）

キャラ応募、まだまだやっていますので皆さんアイデアのご提供お願いいたします！ 詳しくは前回の話のアトガキをみてください！

力、それは弱きものを守るためにあるもの（前書き）

久しぶりに見てみれば、いつの間にかPV400000越え、ユニ
クは11000越え！

これを励みに、これからもどんどん書いていこうと思ってます！！

力、それは弱きものを守るためにあるもの

——世界のどこかにある都市、天栄都市ワルハラ。

「グオオオオオオオオオツー！」

「退くなあつ！ なんとしても、ここで食い止めるんだつー！」

都市の外縁部。そこで、汚染獣と武芸者の壮絶な戦いが繰り広げられていた。

汚染獣が都市に乗り込んできたのはほんの数時間前のことだった。汚染獣はかなりの速度で都市に接近し、外縁部へと降り立った。だが都市に着く前に念威繰者が汚染獣を発見。汚染獣が外縁部に来るころには、すでに武芸者たちがそこで待ち受けていた。

誰もがこの状況は武芸者が有利だろうと思っただろう。だが、現実には汚染獣のほうが有利だった。

汚染獣が優勢なのは、3つの要因があった。

まず第一に、この都市の武芸者たちには実戦経験がほとんどなかったことだ。自律型移動都市は常に汚染獣を避けて行動する。それ故に汚染獣が襲撃してくることは滅多になく、汚染獣と戦うことはほとんどないため、汚染獣の行動パターンが全く読めないのだ。

第二に、武芸者たちの実力不足。ここにいる武芸者は10代から40代までと年齢層は厚いが、その力量は大差がほとんど無い。熟練の武芸者がほんの少しいる程度だ。

第三に、汚染獣の数だった。たった一体だろうと都市にとっては大変だというのに、それが3体もいるのだ。しかも全てが雄性体第3期。

都市の住民にとって、これほど絶望的なことは無かっただろう。だが、武芸者たちはけっしてひるむことは無かった。例えすぐ隣

に居た友が、仲間が、家族が倒れて言おうと、誰もが汚染獣に立ち向かった。

その背に、全ての命を背負っているからだ。彼らはきつと、たった一人になろうとも汚染獣に突貫するだろう。それだけの決意と勇気が彼らにはあるのだから。

武芸者が皆、命を捨てる覚悟で汚染獣に立ち向かっていった。そんな彼らの戦場に、それは来た。

「ゴアアアアアアアアアアアッ！！！」

その咆哮に、汚染獣が、武芸者全員が上を見上げた。そして、息をのんだ。

「嘘、だろ……」

誰かが、そうつぶやいた

そこに居たのは、今相手にしている汚染獣に似た形態をした汚染獣だった。だが、違う。白亜の甲殻は汚染された空でも目立ち、成長の過程で捨てていくはずの手足はむしろ太く逞しいものとなっている。そして、最も特徴的な尾はまるで燃え盛る炎を閉じ込めたような、紅蓮の剣になっている。

もしあれがこの場に加われば、勝てない。武芸者全員がそれを直感的に悟った。

一方汚染獣たちは歓喜の咆哮をあげる。今の状況では餌にありつけないが、あれが加われば早く餌にありつけると思ったからだ。

片や絶望し、片や歓喜する。だが白亜の汚染獣は、皆の期待を裏切った。

ドズンッ！

「……え？」

武芸者たちは我が目を疑った。

それもそうだろう。敵だと思っていた白亜の汚染獣は、急降下し、一瞬で汚染獣の胸を尾の剣で貫いたのだ。

白亜の汚染獣は尾の剣を引き抜く。そして、目にもとまらぬ勢いで尾を振り、残る二体の首を刎ねる。

ゴトンと、地面に汚染獣の首が落ちる。血しぶきが首の断面から湧き上がり、呆然とたたずんでいる武芸者たちの顔や体を濡らす。

あまりにも突然すぎることに、武芸者全員がたたずむ。そんな武芸者たちを横目に、白亜の汚染獣はゆっくりと雄性体の屍による。そして雄性体の中でも一回りくらい大きい屍を口に咥え、飛んだ。

だが、この後の行動に武芸者たちはまた驚かされた。

白亜の汚染獣がエアフィルターを抜けるその一瞬、尾の剣の先端から紅蓮の焰が打ち出されたのだ。化鍊剄を扱う武芸者の何倍もの焰は、残っていた雄性体二体の屍に直撃。一瞬で屍を包み込み、焼き尽くしていく。

突如現れた汚染獣の、あまりにも不可解すぎる行動の数々に武芸者たちはもはや言葉を失っていた。そんな武芸者のことなど眼中にないと言わんばかりに、白亜の汚染獣は都市を離れていった。

——後に今回の戦いは、この都市では語り継がれることになる。そして、その話は人から人へと移り渡っていき、様ざまな都市でこう噂されることになる

『都市を守りし、白亜の守護竜』と——

力、それは弱きものを守るためにあるもの（後書き）

初めて三人称で書いてみた感想。

やっちなったなあ……………。

勢いで書いたはいいいものの、改めて見直すと初心者が書きました、
って言うのが簡単に分かっちゃうなあ。

ま、いまさら悔んだって意味ないし、ポジティブに行くとしめますか。
それとついでに、まだまだキャラ募集していますのでどしどし送っ
てください！ 詳しくはキャラ紹介の後書きに書いてあります。

修行、それは師匠側の負担が大きい仕事 其の一（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

実を言うとここ最近になって部活やテストの忙しくなってしまう、なかなか書く機会が無かったので、このように遅れることになってしまいました。

こんな愚鈍で駄文なクソ小説でも読んでくれて、今まで更新を舞ってしてくれた皆さまには、大変感謝しております。

これからもこんな小説でよければ、よろしくお願いいたします。

修行、それは師匠側の負担が大きい仕事 其の一

「実戦式の訓練だあ？」

「ああ、ぜひとも君に頼みたいのだが」

久しぶりにツエルニに寄ってみると、都市外縁部まで来たカリアンからそんな提案があった。

前にここで汚染獣と戦った後、どれくらいの時間がたったのかは分からないがカリアンはすでに生徒会長になっているようだ。だとすれば、おそらく今は5年生といったところか。時間がたつのは早いな。

つと、話がずれたな。

「別にいいが、何だっていきなりそんなこと頼むんだ？ 訓練なら幾らでもやりようがあるだろ」

「……確かに、訓練ならね。だけどそれは全て対汚染獣用ではない。汚染獣との戦闘は、実戦以外ではあり得ないからね」

「ん……ま、確かにそうだが……」

カリアンの言うことはあんがち間違っちゃいない。ほとんどの都市で行う訓練と言えば、都市間の戦争のために技を磨いているようなもんだ。武芸者同士での戦闘は、正直な感想を述べると生ぬるい。特に学園都市だとその傾向がかなり目立つ。確かに、今のうちに俺が徹底的に鍛えておけば、雄性体第一期くらいまでは大丈夫になりそうだが……

「……俺、手加減なんて言葉知らないがそれでもいいのか？」

この世界に来てから、俺は何事も死ぬ気でやってきてしまったた

め、手加減をするということを全く知らない。だって一瞬でも気を
そらせば殺られるような世界だぜ？ 加減なんて、出来るはずもな
い。

警告ともとれる俺の言葉に、カリアンは薄く笑う。

「ああ、むしろ殺す気で彼らを鍛えてやってほしい。彼らもその方
が喜ぶだろう」

「……はあ、分かったよ。その代わり、死人が出ても文句言つなよ」

我ながら物騒な言葉を吐く。しかし、内心ではほんの少し嬉しく
も感じていた。

孤独だと思っていたのに、こうやって俺と言う存在を認めてくれ
る奴がいる。その事実が俺を嬉しくさせた。

「あ、そう言えば」

「ん？」

「俺の預けたあの二人はどうだ？ 元気にしてるか？」

一応、助けた身としてはあの二人のその後は気になる。

「ああ、あの二人か。彼らは元気にやっているよ。武芸者で無い私
が言つと信憑性が無いが、腕は良いほうだと思うよ」

「そうか……それだけ訊ければ十分。あとは訓練の時に様子を見る
よ」

「そうしてくれ。それでは私はそろそろ戻るよ」

「ああ、じゃあな」

歩き去っていくカリアンに短い手を振る。さて、あとは武芸者た
ちが来るのを待つだけか。

どれほどの腕があるのかを想像しながら、俺は外縁部で待った。

死屍累々とはまさにこの光景を言うのだろうか。

カリアンに頼まれた通り、武芸者たちを徹底的に鍛え上げるために殺す気で戦った。もちろん本当に殺そうなど微塵も考えてないが、そうした方がより実戦に近いだろうと思ってやった。

結果はこれだ。

学園都市の武芸者にしては根性のある方だろう。どれだけ倒れようと、必死になって俺にくいついてきた。味方を見捨てようとはせず、コンビネーションも良い。チームもよくまとまっていると俺は思う。

だが結果は散々なものだった。武芸者たちの全力を込めた劉技は俺の甲殻にほんのちょこつと傷をつける程度だし、尻尾の一振りでも伸びている奴もいる。殺す気でやれという要望に応えるため、『紅蓮』（尻尾から出す炎の技名）を10分の1以下の威力で一発打つた。そしたらほとんどの奴らが木の葉のように吹き飛んで動かなくなるという悲惨な結果となった。……俺のせいじゃないからね？

（ま、それでも頑丈なのが少しいるだけでも喜ぶべきか）

視界に映る影は大体20人くらいか？ 残っているほとんどは隊長クラス。その中には見知った顔もいる。

（知ってるのだと、ニーナにシャーニッド、ダルシエナ、ディン、ヴァンゼ、ゴルネオ、シャンテ、それで俺の助けた兄妹、その他は隊長クラスのやつらか）

今気付いたけど、あの兄妹の武器は兄っぽい方が銃剣……デカイガンブレードのほうが正しいかな？ 妹っぽい方が身の丈ほどデカイチャクラムか。またなんとも個性的な武器だことで。

さて、話を戻すがこいつらの戦闘センスは悪くない。だが、まだ荒削りと言ったところ。こいつら全員で戦えば、雄性体第一期くらいなら良い勝負になりそうだけど……そう言うわけにもいいからな。

これは先が長いがその分成長が楽しみだ。そう内心考えながら笑みを浮かべていると、

「はあああああっ！」

ニーナが勇ましい声をあげながら突っ込んできた。ヴァンゼやダルシエナなどの近距離戦闘組もすぐにそのあとを追いつき、シャーニッドら遠距離戦闘組も後方支援のため、銃や弓を構える。

たまには、こういうのも悪くないかな。そう思いつつ、俺は両翼を広げ迎撃態勢を取った。

其の二

——二ナ達との訓練の後、色々なことがあった。

まずあの兄弟が俺に接触してきたことだ。補足情報だが、あの二人の名前は兄の方がホムラ。妹の方がシズクというらしい。背中合わせで輝きあう、美しい響きだと俺は思った。

正直、あの兄妹が俺に話しかけてきた瞬間、俺はこいつらに復讐される決意を固めていた。だって俺はあいつらにとっては、生まれ故郷と両親を殺した汚染獣と同じだ。復讐されても、何らおかしくは無い。

「すまなかった」

俺は二人が言葉を発する前に頭を垂れた。そしてそのままの状態
で言葉をつづけた。

「もしも、お前たちが復讐を願うのであれば、今この場で俺の首を断つといい。俺はお前たちがそうしたいと願うのであれば、喜んでこの首を差し出そう。お前たちには、それをする資格がある」

酷く残酷なことを言ったと思う。だがこうでも言わなければ、俺の気が済まなかった。

無言の空気が何分も続いた。その間も俺はじつとその姿勢を続けた。きつと俺はここで終わる。そう思っていた。

「……頭を、上げてください」

予想外の言葉に、目を見開く。そして頭をあげれば、優しい瞳で俺を見るシズクがいた。ホムラも目つきこそ悪いものの、其の瞳は

復讐を望むモノの瞳ではなかった。

「……憎く、ないのか？ 俺はお前たちに大切な物を壊した汚染獣と一緒に存在なんだぞ？」

「確かに、父と母、それに友人たちを殺した汚染獣は許せません。一生、この憎しみを忘れることはできないでしょう」

「なら、なぜだ？」

憎いのなら、なおさら俺のような存在を許せないはずだ。もしも俺が彼女たちの立ち位置なら、許すことはできない。

だがシズクは、なおも優しい瞳のままで俺を見つめる。

「……ならシンさんに問いますが——命の恩人を殺すことに、いたい何の意味があるのでしょうか？」

静かに、シズクは俺にそう問うてきた。

その瞬間、俺は理解した。彼らは、初めから俺のことを憎んでないなかったのだ。俺を命の恩人として見ていてくれたのだと。

俺は、余りにも馬鹿だった。言いようのないほどの大馬鹿野郎だった。勝手に一人で憎まれているものだと思いつけ、勝手に殺されるものだと思ってた。誇大妄想もいいところだ。

頬を何かが濡らす。それが涙だと分かるのに数秒の時を必要とした。まさか化物になっても流す涙があるとは思っていなかった。

二人が驚いているのが心配で分かった。だが気付いても、俺は涙を流すのを止められなかった。声を押し殺さず、咽び泣いた。

俺は、決意した。

さっきまでの馬鹿な決意をどぶに投げ捨て、新たな決意をこの身に抱いた。

守ろう。この二人を、この都市を。たとえこの身が減じようと、この都市の武芸者が俺を殺そうとしても、レギオスに存在する全て

の汚染獣がこの都市を狙おうとも、俺はこの都市に住む全ての人間を守っていつと、決意した。

其の二（後書き）

やっとテストが終わって、なんとか書きあげることができました……いやほんと、テストで生気がこっそりと削げ落とされました。

学生である以上、テストは避けて通れないものですが……もうほんと疲れます。

まあ、でも終わったのでこれからは頑張って書いていこうと思います！

それと、キャラクターの応募ありがとうございました！ その数は多くなかったものの、応募してくれた人があるだけで作者は嬉しいです！ 出来る限り使っていこうと思っていますので、登場を楽しみに待っていてください！

キャラ紹介2（若干のネタバレっぽいを含みます）（前書き）

名前に関しての突っ込みは一切無しの方で！！
随時更新するかもしれません

キャラ紹介2（若干のネタバレっぽいのを含みます）

ホムラ・リュウエイ 男

現在武芸科1年生。炎のような真っ赤な髪をしていて、瞳も紅蓮に染まっている。背はレイフォンより少し高い程度。

生まれ故郷の都市、ベリツェンを汚染獣が襲撃。ほぼ全壊状態にされ、両親を失う。そのとき何の因果かかった汚染獣、シンに助けられ、ツエルニに連れてこられる。

性格はぶっきらぼうで言葉に容赦がない。だが思いやる気持ちは人一倍で、ようは不器用なだけで根はやさしい。

両親を失ってから、妹のシズクを異常なまでに溺愛しているため、シズクに近寄る男は誰であろうと抹殺する。

自身の恋愛ごとにはかなり疎く、シズクからよく朴念仁と呼ばれている。

サファイアタイト

武器は青玉鍊金銅の銃大剣。形はぶっちゃけて言うとかンブレード。刀身に回転式の弾倉が付いており、それに紅玉鍊金銅ルビータイトを使用している。大剣としての接近戦。さらに柄の部分が僅かに湾曲し、引き金が付いている為、剄を注ぎ引き金を引くと刀身から斬撃が撃ち出され、中距離戦にも対応している。おもに近距離戦闘が得意。戦闘方法は両親に教えられているため戦闘能力はかなり高い。技などはかなり荒削りで、力でごり押すことが多い。だが決して自分の力を過信しておらず、日々無茶な鍛錬を積んでいる。

シズク・リュウエイ 女

ホムラと同じ武芸科1年生。透きとおった水のような色の長髪を

し、蒼色の瞳を持つ。背は二メートルと同じくらい。

ホムラと兄弟で、同様にシンに助けられてツエルニに来る。

性格は社交的で、誰に対しても平等に接する。だけど自分勝手な人やくだらない人にはかなり黒い笑みを浮かべる。だが本気で怒ると何の感情もない顔つきになる。

ホムラと違い、恋愛^{さと}ことには聡い。

都市と両親を失ったことで、人の死を誰よりも恐れている。そのため、自身を犠牲にしてまで他人を守ろうとする無茶なところがある。

武器は鋼鉄錬金銅の巨大チャクラム。刃の中に粒子状にした紅玉錬金銅が散りばめられている。大きさは身の丈より少し小さいくらいで、刃の部分がギアのようにデコボコしているため、スパイクの役割をしている。中、遠距離戦闘を主として戦う。ホムラ同様に戦闘は両親に習っているためそれなりに強い。ホムラと違い、力ではなく技を極めているため、トリッキーな戦い方をする。ホムラ同様、鍛錬を欠かさない。

キャラ紹介2（若干のネタバレっぽいを含みます）（後書き）

この二人の視点で書くときもあると思います。

必殺技、それはネーミングに悩むもの

「……よし、ここならいいだろうな」

俺は夜のツエル二の外縁部、そこでも一番人っ気のないところに移動し、あることを実行しようとしていた。

其のあることは——技の開発だ。

いまさらながら俺には武芸者みたいに多種多様な技が全く無い。あるとしても、せいぜい『紅蓮』だけで、ほかは汚染獣の巨体を生かしただけの攻撃ばかりだ。今後のレギオスで生き残るためにも、技を開発して生き残る手段を増やしていかないとやばいと思う。万が一、グレンダンになんか遭遇することを考えると………容易に俺の未来が想像できてしまう。もちろん、最悪の未来であることは言わずとも分かるだろう。

「とりあえず……ふんっ！」

俺は尾剣^{ビケン}に神経を集中させる。それと同時に尾剣を覆うように深紅の炎の出現した。最近、ようやくこの炎を出すコツを覚えたところだ。集中解くと、すぐに消えちまうのが今のところの問題点なんだよな。

だけど、集中さえしていれば炎は俺の意思に従って自在に形を変えらる。炎で剣の幅や長さを増やすこともできるし、その気になれば身体全体に炎を纏うことだってできる。前に一度失敗しかけて、甲殻がこんがり焼けたこともあったけど……。

さて、気を取り直してさっそくやるとするか。

俺は頭の中で炎をどんな形にするかをイメージ、そしてそれを尾剣に送りこむ。そして、

「おらあああつ！！」

気合と共に夜の闇が覆う虚空へと放った。

放たれた炎は球状に形をとり、空高くまっすぐに飛んでいく。そしてエアフィルターを突き抜け、目測で約200m強ぐらいまで上がったところで変化が起きる。

球状の炎はまるで糸に絡め捕られたようにその勢いを失い、空中で静止した。汚染物質を焼きながら制止をする炎。その変化は、まだ続く。瞬き一つで炎は半分ほどの大きさに萎んだと思った瞬間、一気に膨れ上がり弾ける。それと同時に内に凝縮された炎が数多に散らばり、汚染された大地へと降り注いでいく。大地は一瞬で落ちる炎に包まれ、轟々と夜の闇を照らしていた。

「名付けて『断罪』と言ったところかな？」

荒れ狂う炎が大地を焼き尽くしていく。それはまるで神話で出てくるような光景だった。

「だが、まだまだ改良の余地があるな……」

俺はチラリと視界の端に視線を向けると、其処にも少なからず先ほどの炎が落ちていた。イメージ的には、広範囲の敵を一掃しようと思って考えた技だから、範囲はでかければかいほどいいが……もう少し絞れるようになったほうがいいな。都市部にでも落ちたら最悪だ。

「あとは練習あるのみか」

俺はもう一度、さっきと同じようにイメージを固めていく。そして、放つ。その繰り返しだ。その内、疲労が重なりいつの間にか夢

の中へと落ちていった。

次の日、都市から見渡す限りの汚染された大地が真っ黒になって
いることが都市中で騒ぎになったことは言うまでもない。

変態、それは形態を変えること

「……おかしい」

ここ最近、自分のからだに変化が起きている。

最初に変化を感じたのは食欲だ。ここ最近の食事はカリアンたちから支給されている巨大な肉の塊を最近主食としているのだが、幾ら食っても満腹感を感じることが無い。むしろ食欲が増す一方だ。

その次は睡眠時間だ。前まではそう長い時間寝なくても生活に支障は出なかったが、最近は眠気が酷い。寝る時間が多くなっている。

最後に感じている変化は体の動きだ。都市に来てからというもの、武芸者たちが力試しと言って、俺と戦ったりすることが多い。別にこいつらの攻撃は、現段階では痛くもかゆくもないが、現実をぶつけてやった方がいいだろうと思って、死なない程度に潰している。だがどういふことか、ここ最近体の動きに支障が出る。一番柔軟なはずの尻尾でさえ、動きに支障が出ている。

一体なんだ、と考える俺。そして少し経ち、俺はある事にたどり着き、青ざめた。

「これは、あの時期が来たのか……！？」

だとしたら、ここであれをやるのは不味い。ひじょく不味い。下手をすればとてもヤバいことになってしまう。

俺は考えた末、ある行動を起こすことを決意した。

『……もう一度言ってくれないかな?』

「だーからー、脱皮の時期が来たからちよつとだけ都市を離れる
つていったんだよ。これ以上の説明いるか?」

『……出来れば説明してほしいな』

ちつ、これだからボンボンは面倒なんだよ、となんとなく意味の
わからないケチをつけながら、しぶしぶ目の前にある念威に向かっ
て説明を開始する。

「まー簡単に説明するとだな、俺を含めた汚染獣たちはある程度成
長すると脱皮をするわけだ。そうやって脱皮をするたびに汚染獣は
強くなっていくわけだ。だけどその脱皮が以外と曲者でな、脱皮を
する時ってかなりの栄養を使うわけよ。そりやもう、大気中の汚染
物質いくら取り込んでも足りないくらい栄養使うんだよ。だから脱
皮直後の汚染獣たちはそりやもう腹ぺこの餓死寸前の状態なんだよ。
もしここで俺が脱皮なんかしたら、もしかしたらお前たちを捕食し
ちまう可能性があるんだよ。だから俺はここを離れて脱皮する。分
かったか?」

『……つまり、私たちの安全のためにこの都市を離れてくれる、と
いうことなんだね?』

「簡単に言えばそういうことだ」

この前守るってきめといて自分でぶっ壊したら、シャレにならん
からな。

『いつ、ここを発つんだい？』

「出来れば今すぐには発とうと思ってる。脱皮って栄養以外に時間もかなり必要だからな」

ついでに痛みも半端ないんだよね。前に一度体験したときはあまりの痛みに昇天しかけたし。

『……分かった、そう言うことなら仕方が無いね。だが出来る限り、早くこちらに戻ってきてほしい』

「分かってるよ。俺だって、こんな未熟者集団を放っておけるか」

俺は翼を広げながら答える。久しぶりに動かす翼も、若干動きが鈍いが跳べないほどでもない。なんとなく関節部分が痛いけど、このくらいだったら我慢できるな。

俺は飛び立とうとした瞬間、いい忘れていたことを思い出した。

「そういえば、帰ってきたら姿形変わってるかもしれないけど、攻撃しないでくれよ？」

『……保障は出来かねないが、善処はしよう』

「いや保障しようぜ！？ てか多分尻尾の部分だけはそんな変わらないと思うからそこ目印にしてくれよ！」

『ああ、それならおそらく大丈夫だ』

「……なんだか、不安になってきたな」

なんだか脱皮する前にドツと疲れたな。さっさと行って脱皮しないと栄養使い果たしちまいそうだ。

「んじゃま、さっさと行って帰ってくるから、ガキどもに鍛錬を怠るなって言っておいてくれよ」

俺はそれだけ言うと、外縁部から飛び立ち、エアフィルターを抜けた。

人間にとっては害でも、俺にとっては心地の良い、汚染された空気が全身を包んでいく。久しぶりにこの空気を吸ったな。

そして俺はツエル二の進行方向から少しずれたほうへと飛ぶ

「さてと、ここから先何もなければいいのだがな」

そう願いつつ、俺は脱皮に適していそうな岩山を探していった。

暇、それは神をも殺す猛毒

「……………暇だ」

俺はデカイ岩に張り付きながら、そうつぶやく。

今俺がいる場所は、ツエルニから遠く離れた（と思われる）場所だ。ここには山ほどある岩がそこかしこに堂々とそびえている、例えるなら岩で作られた森のようなものだ。自然の力つてのはすごいなあ、と最初の頃は感心していたものの、ここ最近ではそんなことも感じなくなった。

ああ、暇だ。途方もなく暇だ。今なら暇すぎて死ぬそつだ。暇は人だか神を殺すつて聞いたことあつたけど、ホント殺されそつだよ。

「……………腹、減つたなあ」

久しぶりの脱皮のせいかな、それとも老成体になるためなのか、過去に経験した脱皮以上に時間と栄養が消費されている。詳しい時間までは分からないが、ここに張り付いてジツとして、もう2週間以上は経つてるだろう。大気中の汚染物質を吸っているから餓死することはないだろうけど、空腹感だけは抑ええることができない。

「あいつら、元気にやつてるかなあ……………」

今、ツエルニにいるやつらはどうしているだろう。

カリアンが俺の言葉をちゃんと伝えてくれたのなら、きっと生真面目なニーナやヴァンゼらへんは訓練をきちつとしてるだろう。ゴルネオもそうだろうけど、おそらくシャンテあたりに苦労してるな。デインとダルシェナたちはいいとして……………シャーニッドはおおかた遊んでるだろうな。他の連中も訓練に励んでるだろうな。

「つといかんいかん。このままじゃ死亡フラグが立ちそうだ」

こんな死ぬ前の人間が思いそうなこと考えてるのはよそう。

俺はふう、と嘆息を漏らす。そして寝て時間が過ぎるのを待とうと考えた。だが

「——っ!？」

瞬間、肉体に変化が起きた。

これまでの脱皮で感じた、あの独特の違和感。肉体そのものがドロドロに溶けて、形を変えるような奇妙な感触が今体中に駆け巡る。毎回感じてはいるが、いまだにこれには慣れることが無い。今回も意識が跳びそうになるが、それを何とかギリギリのところで抑える。

「ついに、俺も老成体の、お仲間入り、か……!」

恐怖は、少しだけある。だがそれ以上の喜びがあった。老成体になれば、これまで以上に戦うことができるんだからな。喜ばないほうがおかしいぜ!!

ビキビキと、今の肉体に亀裂が入っていく。同時に強烈な虚脱感と痛みが体中に回っていく。いつもなら瞬間が一番嫌いだ、今はそれさえ喜びに変わっている。

亀裂が頭から尻尾のほうに回ったところで、止まった。そして俺を包んでいたどろりとした液体が亀裂から漏れだし、それが岩を伝って地面に落ちていった。

俺はどろりとした液体を体をゆすって跳ね飛ばす。そして、

「おおおおおおおお——っ!！」

天に向かって、人間味の帯びた咆哮と轟かせ……た？

……まてまて、なんかおかしいぞ。何かが決定的におかしいぞ！？

俺は反射的に液体の反射を鏡代わりにして、自身を見た。

そこに映るのは、竜であって竜で無いものだった。顔は生前の自身と同じ顔で肌の色も同じだ。頭部からは黒髪と灰色の短い角が二本生えている。四肢は人間のそれとほぼ同じだが太く雄大だ。肘から先は鈍く輝く白色の鱗で覆われて、その先端に鋭利な5本の爪が生えている。足のほうは膝から先が鱗に覆われ、手とは違って三本の太く強固な爪、そして後ろに向かってもう一本爪が生えている。臀部の割れ目、その合間からは長大な深紅の尾も生えていた。そして極めつけは肩胛骨の合間より伸びる、腕や足とは対極の色をした漆黒の翼だ。骨格の間に翼膜を張らせたそれは蝙蝠の羽根のようでもある。そして局部を保護する防具は、よく見ると自身の体の一部分だった。

竜人。例えるならばそう言うべき姿で、俺は映っていた。

「……………」

結局そのあと、俺はあまりの衝撃で数時間その場を動くことができなかった。

暇、それは神をも殺す猛毒（後書き）

ちなみに局部とは体の限られた部分を指し、陰部などを指す言葉です。

そして、問題発生です。

半人化、とでも言うべき状況に勢いになってしまいましたが、ここからどうするのが考えどころです。

このままの状態で物語を進めるべきか、それとも完全な人化と竜化を主人公ができるようにするか、それかそれ以外の選択肢を選ぶべきか……めっちゃ悩みます。

これを見てくれた人で、何かしらアイデアが有るといふ人がいましたら、メールか感想のほうに書き込んでくれませんか？ それをもとに書いていこうかなと思いますので。

それでは、次の更新まで楽しみに待っていてください。

擬人、それは人であって人でないもの（前書き）

読者の皆さま、たくさんのアイデアをご提供いただきありがとうございます。
ございました。

そして更新が遅れてしまい申し訳ございませんでした。

駄文の可能性大ですが、良ければ読んでください。批評は、作者の
ハートは脆いので、できれば書かないでください。

擬人、それは人であって人でないもの

見渡す限り、荒れ果てた大地が続く。

視界のすべてを域とし生けるものすべてを蝕む粉塵が吹き荒れ、大地を飲み込んでいく。

命の気配は皆無。この世界の空気は命を蝕む。吸いこめば肉体を内側から腐らせ、触れれば肌を焼き蝕んでいく。この世界そのものが命を拒むように、そこに生けるものは何一つとしてない。

静寂と死が跋扈する世界。

だが静寂はいとも簡単に破られた。

まるでミサイルを爆発させたような爆音が静寂を喰い荒らし、跡形もなく消し去った。

はるか先、荒れ果てた大地が土煙を上げている。

もうもうと上がる土煙。その内側から二つ、何かが飛び出てきた。一つは蜘蛛に似ていた。だが普通の蜘蛛じゃない。身体の作りは都市などで見えるような蜘蛛とほとんど同じにも見えるが、大きさは優に10メートルを超えている。足の一本一本が何百年と育った大木のような太さをし、なおかつ槍のように鋭利だ。体中に生える体毛のようなものも針のようになっていて。気持ちの悪い動きをする牙の生えた口からは奇怪な雄たけびを上げている。

汚染獣。この汚染された大地を支配者が如く生きる、この世界の絶対的な強者。そして人類の天敵でもあり越えなければいけない壁でもあった。しかもこの個体は、汚染獣の中でも別格の老性体。幼性体や雄性体とは一線を引いた、限られた汚染獣のみが辿り着くことのできる至高の存在。

だがその老性体はすでに息絶え絶えとなっていた。体の各部からは人間とは違った色の血を流し、いたるところに炎で焼いたような焦げた跡がある。

おかしい事だ。老性体は汚染獣の中でも別格で、おそらくこの個

体は第二期に入るだろう。並の武芸者がいくら集まったところで勝てるはずもない。ここまでの手傷を老性体に負わせることができるのは武芸者の中でもトップクラスに入る者たちだけだろう。だがこの一帯すべてを見渡しても都市は一切見当たらない。

なら何がここまで老性体を追い込んだのか？

その答えはとても簡単なものだった。

老性体のはるか頭上。

そこにいたのは、汚染物質吹き荒れる中で防護服を着ずにボ口布を服代わりにし、緋炎の槍を携えた一人の青年だった。

「っ、だらっしやああっ！！」

青年の掛け声の刹那、老性体を囲むように紅蓮の炎がわきあがり、動きを封じた。

老性体の動きが一瞬だけ止まる。青年は、その一瞬を見逃さなかった。槍を構えたまま上半身をひねり、一瞬溜め、突き出す。

『紅蓮』外部放出系・『白竜』

突き出された槍の先端から、白い陽炎のような焰が躍り出る。放たれた焰は竜へと姿を変え、汚染物質を焼き、大きくうねりながら矢のように老性体の巨大な腹部を貫いた。

老性体が苦痛の叫びをあげる。腹部からおびただしい量の血を振りまきながら暴れる。そして幾多もの複眼で己が腹を貫いた怨敵を捉えると、青年に向かって吠えた。

同時に口内から荒縄ほどの太さの粘着質の糸が吹き出る。青年は身をひねり、炎を放ちながらそれを避ける。だがそれでも避けきれなかった糸が青年の腕に絡みついた。

まばたき一つを置いて、酸独特のツンとした匂いが青年の鼻をなでる。青年は瞬時に腕に巻いたボ口布を掴み、糸ごと投げ捨てた。布の下ので皮膚を見ると、皮膚は焼けただれて痛々しい姿となっていた。

常人ならば、その痛みで喘いだだろう。だが青年は痛みを無視し、その顔に笑みを浮かべながら大地に降りる。そして、老性体がけて走った。

老性体もまた、青年に向かって歩く。

二体が徐々に近づき、交差する瞬間、

老性体の脚が振り上げられ、青年向かって勢いよく振り下ろされた。

青年はそれを真上に大きく飛んで避ける。

宙を舞う青年。老性体はこの瞬間を見逃さなかった。全開になった口内からさつきほどよりも太く、長く、多い数の糸を青年に向けて吐き出した。

空中で身動きも取れず、見る見るうちに糸が青年を覆い尽くされ、繭のようになってしまった。

老性体がそれを見て、勝利の雄たけびを上げた。だからこそ、老性体は気付いていなかった。落下してくる繭が白から徐々に赤みを帯びてきたことを。

繭が老性体の目の前まで落下してきた、その瞬間——内側から繭が爆散した。

老性体が反射的に見た瞬間、緋炎の槍と共に青年が飛来し、老性体の複眼を貫いた。

断末魔の絶叫が響いた。

槍から発せられた超高温が眼球内の水分を一瞬で沸騰させる。想像を絶する痛み到老性体はがむしゃらに暴れまくる。動くたびに傷口からは血が噴き出して、さらに老性体を苦しめた。

青年は暴れまわる老性体の上で必死に踏ん張り、槍を引き抜く。そして、さらに深く槍を突き立てる。

『紅蓮』内部破壊系・『流焰』

瞬間、老性体が火を吹いた。

身体のうち放たれた炎が老性体を内側から焼き尽くしていく。口から炎を嘔吐し、目を焼く。そして老性体の身体の内側という穴

から間欠泉のように吹き出た。

その光景が数十秒間続く。そして炎が消えた頃には、老性体の巨体は地面へと崩れ落ちていた。

再び、荒野を静寂が支配する。老性体の頭上に立つ青年は突き刺した槍をゆっくりと引きぬき、付いた血を振り払い、背中にしまう。

「ふう、やっとこさ倒れてくれたよこいつ」

攻撃方法めんどいし頑丈ってなんだよこいつと一人で愚痴る青年。愚痴りながらも頭上からぴょんと地面に降りて、老性体の脚を一本掴み、肩に乗せる。そして体格の差を関係なしに蜘蛛の巨体を引きずるりながら歩いていく。

「ま、丁度いい感じに焼けたし、帰ってさっさと晩飯にしますか」

青年——シンはそう呟きながら、荒野をゆっくりと歩いて行った。

重要な報告

この小説を読んでくださっている皆様。

このたびは更新がまったくできずに、大変申し訳ございませんでした。

作者は現在、学生故にテスト期間のため、更新ができない状態にございます。

それ以前は、体調を壊したり、パソコンが不調だったりして更新ができませんでした。

もっと早くお知らせすればよかったと、反省しております。

早ければ来週には更新を再開できると思いますので、どうか今しばらくお待ちください。

皆様にご迷惑をおかけしたこと、心より謝罪申し上げます。

シズク編、それはシズクを書くこと 其の一（前書き）

この小説を待っていてくださった方々、やっとのこと更新ができました。

今まで待っていたいただき、誠に申し訳ございませんでした。

いつものごとく、わけのわからない文章でございますが、それでも良ければひと読んでもください。

今後はできるだけ早く更新ができるように、頑張っていきたいと思っています。

それとついですが、他にも小説がいくつかありますのでそちらもよかった見てください。

それではまた、次の更新の時にお会いしましょう。

シズク編、それはシズクを書くこと 其の一

ここ、学園都市ツエルニは、学園都市連盟に加盟する学園都市の1つである。

6年制で、いわゆる普通の勉学を学ぶ一般教養科や武芸者を育成する武芸科を始めた様々な学科があり、約6万人の学生が住んでいる。武芸大会や汚染獣の襲撃に対する戦力の中核となる存在として、武芸科の中でも特に優秀な生徒を集めた「小隊」が組織されている。

だがいかに学園都市内で優秀とはいえどその実力は如何せん、素人に怪我一本生えた程度の実力。

ツエルニにあつまる学生たちは、良く言えば将来が期待できる逸材の宝庫。悪く言えば未熟者の集まり、なのだ。

そんなツエルニだが、偶然か必然か、はたまた運命の女神の気まぐれなのか、ごく稀に若いうちに才能を発揮した、いわゆる天賦の才を持った生徒が入ってくることもある。

普通こういった少年や少女は自身の都市から出てくることはまずない。

理由は至極簡単。武芸者や念威操者は数が限られているからと、むざむざ他の都市に才能ある人間を渡すのはあり得ないからだ。才能ある武芸者や念威操者を他の都市に行かせるということはつまり、都市そのものの生存確率を著しく下げる、自殺行為に他ならない。

だが学園都市には才能を持ったものが来る。それはつまり来るものは何らかの業、もしくはそれ相応の理由を背負っているものが多いのだ。

彼ら、シズクとホムラもその中の一人だった。

広い会館の、さらに大きな壁で遮られて教室二つ分しかない空間はある種の空気が張り詰めていた。壁際には様々な武器が置かれている。

その空間の真ん中あたりで、二人の少女が武器を構えていた。透き通った水のように青い髪を腰のあたりまで伸ばした長髪、そしてその髪の色が少し濃くなったような蒼の瞳を持つ、柔和そうな美しい少女——シズクだ。まるで水の精霊が人へ乗り移ったかのような美を持つ少女。だがその身に構える武器は、あまりに少女に似合わない武器だった。

一言で表すならば、巨大な歯車と言える代物だった。外見は黒く無骨で、まるでチャクラムをでかくしてその周りを凹凸にしたような形をしている。その凹凸の間に1か所、刃のない持つ部分があった。対する少女は、シズクとは正反対とまではいかないものの、鋭い^{ウツ}空気を纏っている。シズクを水の精霊^{ウンディーネ}に例えるとすれば、少女は戦^{ウツ}乙女^{ルキユリ}。まさに戦うために生まれた運命を背負ったように見える少女だ。

少女——ニーナが手に持っている武器は鉄鞭と呼ばれる武器だ。鉄鞭はつまり、頑丈な打撃武器だ。棒のように振りやすく、剣のように刃こぼれを心配することなく、折れる心配もない。だがその重量は並ではなく、扱うのは容易ではない。それを両手に持つ少女の筋力と練熟には舌を巻くものがあった。

「準備はいいか？」
「いつでも、どうぞ」

ニーナの問いに、シズクは短く答える。

両者が武器を構える。

瞬間、ニーナが動いた。

単純な突進、だが早い。シズクとの間合いを一気に詰めて、その勢いのまま右の鉄鞭を突き出す。腹を狙ったその攻撃を、シズクは身をひねりかわした。ガラ空きとなった背中に左の鉄鞭が振られる。それをシズクはさらに身をひねり、巨大なチャクラムでガードし、鉄鞭の威力を流すように回転してニーナの攻撃から脱する。

シズクはニーナから距離を取った。

同時にシズクは内力系活剏を全身に奔らせ、さらに身体を捻り、戻る勢いでチャクラムを投擲する。

放たれたチャクラムはニーナ向かって直進する。ニーナはそれを正面から受けるつもりか、鉄鞭を交差させるように構え、その場にとどまる。

交差した鉄鞭と高速回転して飛んでくるチャクラムがぶつかる。

鉄同士が高速でぶつかり合い、火花が散る。

チャクラムと鉄鞭の一瞬の均衡、だがそれはすぐに崩れる。

ギンツ、と鉄の高い音と共にチャクラムが上へと弾き上げられる。力の押し合いではニーナが僅かに上だったようだ。だがシズクは弾き上げられることを分かっていたのか、宙を飛んでいた。そのまま弾かれたチャクラムをキャッチし、また投げる。

ニーナはまたそれを弾き飛ばそうと構えたが、両腕の異変を感じ、舌打ちをしながら後ろへと飛び退り回避する。

先ほどのチャクラムの影響か、ニーナの両腕はかすかにだが震えている。おそらくはチャクラムの回転と鉄鞭が真正面でぶつかった衝撃でしびれたのだらう。それだというのに、ニーナの顔にはかすかな笑みが浮かぶ。ニーナはシズクの力量に驚く半面、嬉しさを感じ

じていた。

対するシズクも顔には出さないものの、少なからず驚きを感じていた。両親が武芸者であったシズクは、幼いころから武芸を叩き込まれていた。兄より力が不足している分、技でそれを補う訓練もしていた。だがだからといって、内力系活剷で強化した肉体から放たれるチャクラムの投擲の威力はそこの武芸者の比ではない。それを真正面から受け切り、しかも弾き飛ばす人間などシズクの知る限りではそう多くはいなかった。

（こいつは、きっと強くなるな）

（この人、強くなる……）

両者はほとんど同じことを思い浮かべた。だがそれも一瞬のこと。二丁ナ、そしてシズクは武器を構え直す。

両者がほぼ同時に飛び出す。

そして、武器が交差する。

シズク編、それはシズクを書くこと 其の一（後書き）

感想への返信ができずに申し訳ございません。

どうも作者は感想への返信が苦手なようなので、今後も返信ができるかどうか分かりませんが、それでも良ければ書いてくださっても結構です。

平穩、それは脆くも崩れ去るもの

「あゝ美味かった！ もう腹いっぱい！」

久しぶりに満腹となり、パンパンになった腹を抱えながら、ドンツと地面に座り込む。そばを見れば、肉の部分が一切なくなり、甲殻の部分だけとなった老性体の哀れな姿。まあ、こうしたのは俺なんだけどね。南無三。

今更ながら我が肉体は驚きでいっぱいだ。ちなみに今の俺の姿は脱皮当時の竜人形態。大きさは人形態の時と大差はないのだが、明らかに胃袋に入るはずのない質量の肉を平らげてしまった。消化が物凄く激しいのか、それとも俺の想像の及ばない超常現象が俺の胃の中で起きているのか。まさに神秘がたつぷり詰まっている身体だ。ついでに脱皮してから分かったことだが、姿が三段階で変化できるようにになっていた。

端的に言えば、人、竜人、竜、みたいな感じだ。三段変化できるのはいいがどの形態も一長一短と意外と使いどころが難しい。でも戦闘では相手に合わせて使えるからよしとしよう。

それにしても、

「……………暇だなあ」

爪の先で歯と歯の間をほじくりながら、呟く。

この姿形となってこの世界になじんで、もうどれくらい経ったのかは分からない。途中までは数えていた気がしたけど、いつも死が隣人の世界は毎日があつという間過ぎて、いつの間にか数えるのをやめていた。

理不尽を呪ったことは、最初のころはたびたびあった。どうして

俺が、とか。どうしてこの姿なんだ、とか。数えりや両手両足の指足しても足りないかな。

今となつては食料確保はそれなりにたやすいものとなつてはいるけど、最初のころは獲れないことがたびたびあつたし、他の汚染獣に横取りされたことも稀にあつた。そのせいで何度涙を流したことか。

まあでも、今となつちや良い思い出（？）か。今はこうして安心して居れるねぐらもできたし、食料調達も難なくできるようになつたし、学園都市にも行けたしな。

——それに、なにより平和な方がいい。

平和な世界で生きてきた俺だからこそ、この世界はあまりにも悲しく見えた。ここでは人が死ぬなんて、俺の世界じゃ交通事故と一緒くらいの扱いだろうけど、それでも俺の世界より死のリスクが高すぎる。人同士の諍いだけじゃなくて、汚染獣と汚染物質の脅威もあつて、セルニウム鉱山が無くなれば人は都市と共に終わりを迎える。

強い存在のみが生き残る。そういった意味では、あの都市が滅ぶことはないだろう。

「槍殻都市、グレンダン……」

事実上最高で、最強で、最悪の都市。武芸に秀でた者、もしくは天才たちが集う力の象徴とも言うべき自律型移動都市。だがその最強の都市の中でも一線を画す存在がいる。俺が最も会いたくなく、できれば死ぬまで視界の中に入れたくない奴ら。

そいつらの名は天剣授受者。世界最高の性能を誇る白金鍊金銅と圧倒的な剋を持つ、文字通り化物じみた連中。その気になれば、たった一人でひとつの都市を滅ぼすことだってできるだろう。流石に

やるとは思わないだろうけど、それぐらい凄い奴らだ。

最高に良くて相討ち。悪くて腕一本もっていくぐらいだろう。

もちのろんだが、真正面から俺が戦ったところで勝てることはないだろう。老性体の汚染獣を倒せるようにはなかったが、この前のあれはあくまで戦闘の相性が良かったただけのことであって、他の老性体とはどうなるか分かん。下手すればこっちが餌になることだってあり得る。

まあ、こういった諸々の理由を含めて考えると、やっぱり平和が一番だ。戦いの日々つても男として悪くはないと思うが、平和を捨ててまでそれに浸ろうとは思わない。だから――

「そうやって観察してるだけじゃ暇だろうし、できれば話し合いとかの方が俺はいいんだけど？」

後方、正確に言えば俺の背から90メートルほど離れた廃墟と化した建物の中。人間なら完全な死角となっている場所から何かが俺を見ている。これは……人間じゃない。人間特有のなんとも言えない感じの視線を感じない。機械越しにこちらを見ている感じだ。

――さて、鬼が出るか蛇が出るか……ま、どっちにしろ一筋縄ではいきそうにないな。

さつきからピンピンに感じる。おそらく相当な数の修羅の巷を見てきた者にしか出せない匂いだ。

……もし、俺の予想が正しければ、俺はいろいろな意味で終わるだろうな。そうならないように、今はこの予想が外れることだけを祈る。てか頼むから外れてくれ。

『そうですね、私も見ているだけというのはつまらないと思っていましたので』

だがそんな俺の願いを神様は受け入れてくれなかったようだった。廃墟から出てきたのは、一匹の蝶々。だが俺は発光しながら、しかも汚染物質の中を悠々と飛ぶ蝶々など知らない。

念威端子だ。

蝶々に似た形をした念威端子。そこから、かなり歳のいった老女の声が響いた。

——はい、俺の予感的中。

俺の知る限り、蝶々の形をした念威端子を扱う人間なんてたった一人しかいない。

天剣キュアンティスを持つ天剣授受者、デルボネ。天剣授受者の中で唯一の念威操者であると同時に、グレンダン最高の念威操者だ。思わず、周りに気を向ける。

『あらあら、そんなに身構えなくとも、ここには私以外誰も来ていませんよ』

「悪いですけど俺、知らない人の言葉は信用しないし、自分の眼で見たものしか信じないんですよ。それより、そっちこそそんな無防備でいいんですか？」

『あら、もしあなたにその気があれば、もうすでに攻撃しているのではなくて？』

おっとりとした、まるで孫にでも話しかけるような口調。戦いに来たという雰囲気はみじんも感じさせることがない。だからといって隙があるわけじゃない。さすがは天剣授受者、としか言いようがなかった。

「それで、用件はなんですか？」

『あらあら、もうお分かりになってましたか？』

「どんな汚染獣でも狩り尽くす狂った都市、天下に名高き槍殻都市グレンダン。しかも念威操者のなかで最高ともいわれている天剣授受者デルボネ様が、こんな変異種の汚染獣を観察していた理由があるとしたら、何らかの用件があるとは思えないんでね」

『あら、グレンダンの名を知っているなんて。やっぱり陛下の言うとおり、ただの汚染獣ではないのね』

陛下。その名を聞いた瞬間に、脊髄につららを捻じ込まれるような怖気が全身を支配した。

「……それで、用件は？」

『ふふ、そんなに怯えなくとも、簡単なことですよ』

さっきまで安心を誘うようなゆっくりとした口調が今は恨めしい。まるで死刑を言い渡させるような気分だ。

『陛下がぜひ、あなたに会いたいと申ししていました。すでに迎えの者はそちらに送りましたので、その方についてきてください』

「……俺の意志、関係ないのね」

『ええ、陛下は一度決めたことは必ずやる人ですので』

なんてはた迷惑な、と口に出して言えなかった。言えるはずがなかった。

人知れず、溜息を出す。こっちで生活し始めて幾度となく吐いてきた溜息だが、今回ののはひどく重いものだった。

会話、それは武器を持たない戦争（前書き）

久しぶりすぎてあまりうまく書けていないかもしれませんが、どうかお許しください。

会話、それは武器を持たない戦争

久しぶりに、澄み切った空を見た。

今グレンダンが移動している場所は、季節的に夏と言ったところだろう。今の俺には暑いとかはあまり感じないが、清々しい日差しが空一面から降り注いでいた。

生い茂る緑も、久しぶりに見たせいか、いまにも動き出しそうなほど生き生きしていた。

（なんで……………）

だが、正直そんなことどうでもよかった。こんなことを考えるのは、目の前の現実を受け入れたくない、つまり現実逃避したいからだ。

（なんでこうなったんだっ……………！！）

遠巻きの天剣授受者全員と、紅茶の置かれたテーブルをはさんでグレンダンの女王がニコニコしながら座っているという現実から。

なぜこんな鬼もはだし＋全力で逃げそうな状況になったのか、簡単に説明すると、

デルボネに導かれて都市外延部に来る↓目の届くところにグレンダンがあるのに気付く↓しばらく待つとバイクのような音が聞こえる↓同時に身体に何かが巻きつく感覚↓鋼系だと気付いた瞬間にグンツと思いつき引き張られる↓ジョットコースターのような感覚を味わいながらグレンダンに連行↓気付けば空中庭園のような場所にいた。

以上。ちなみにイスに座っている今も何本かの鋼系が身体に巻きついてます。俺の命思いつき握られています。内心冷や汗ダラダラ

だ。

「……………」

「そんなに緊張しなくていいのよ。リラックスリラックス！」

にこやかに言ってくれるが、この世にリテンスの鋼糸を身体に巻きつかれた状態でリラックスできる奴がいるならぜひとも紹介してほしい。そして俺と変わってほしい。今すぐに。

「……リラックスさせたいなら、まずこの鋼糸を取ってくれないか？ 今にも輪切りにされそうで気が気じゃない」

「あら、リンの鋼糸に気付いてたなんて。やっぱりあんた、面白いわね」

「評価してくれるのは大変うれしい。だから鋼糸を取ってくれ」

「それは無理よ。だって、取った瞬間にあなたが暴れたりでもしたら私の命が危ないもの」

「アンタに傷一本作る前に、こっちはたった一つの命を失う結果が目に見えてるから、暴れたいとも思わないよ」

もし俺が目の前の上様様に攻撃した、瞬間に輪切りにされてその後消し炭になる未来が簡単に想像できてしまう。

（それにしても……）

目の前にいるこの人間、アルシェイラは本当に人間という枠に入っているのだろうか。

グレンダン最強、果てやこの世界最強と言っても過言ではない存在。絶対にして圧倒的な剋の前では並の汚染獣は刹那にも満たない時間で粉微塵になり、最高の性能を誇る天剣さえもその力を受け入れることができない。その気になればその力で全てを支配すること

もできる。

まさに、化物中の化物。

（ま、俺も大概化物だけどな）

目の前に置かれたティーカップを手に取り、紅茶を一口含みながら思った。

元人間だは、普通に人間と話せるは、姿形を変えられるは、人のことを言えた義理じゃない。

それはさておき、いい加減この状態に嫌気が差してきた。俺は本題を切りだすべく、緊張やらなんやらで重くなった口を開く。

「……それで、なんで俺をここに連れてきたんだ？ まさか世間話したくて、なんてないよな？」

「うーん、確かに汚染獣と世間話つてのも面白そうね。だけど今回は違うわ」

「じゃあ、何がしたいんだ？」

「理由は単純よ。ちよつとした興味」

「興味？」

「そう。本来汚染獣は手っ取り早く栄養を取り込むために人を襲い、食べる。そして成長をしていき、さらに凶暴になり、強くなっていく。なのに、あなたは違う。同族である汚染獣ばかりを食べ、人に一切の危害を加えず、あまつさえ人を守ろうとする。さらにその形態と力を徐々に人へと近づけていってる。長いこと生きてきたけど、こんな汚染獣を私は見たことが無い。もっと言いかえれば、存在するはずが無いのよ」

言いながら、アルシェイラの目に純粹な好奇心の色が浮かぶ。

なぜだろう、ここに来て急に俺の頭の中で警鐘が大音量で鳴り始めた。

嫌な予感がする。しかもこれは、とてつもなく面倒で恐ろしいことが起きる予感だ。

そんな俺の状態を知ってか知らずか、だからとアルシェイラが言葉が続けた。

「あなた、天剣授受者になつてみない？」

「……………はあっ!？」

とてつもなく大きな爆弾発言が投下された。

「ていうか、もう決定ね♪」

あまりの急展開ぶりについていけない俺は思いっきり脱力した。

そして、遠巻きに見ていた天剣授受者たち、そのうち何人かの視線がこっちを向いていることに気づき、これから先のことを思うと思わず呟いた。

「……………神様、アンタ本当に鬼畜だよ」

会話、それは武器を持たない戦争（後書き）

最近『青の祓魔師』の小説も書き始めているので、もしよろしければそちらにも目を通してくれるとうれしいです

間話・女王、それはわがままな女を表す言葉

「陛下っ！　いったいどういうおつもりですか！！　あのような化物を天剣授受者にするなど！！」

バンッ！　と円卓を叩くと共にカルヴァーンの怒号が響く。目には不満と怒りの色が一切隠さずに浮かんでいる。

カルヴァーンのみではない。彼以外の天剣授受者たちの中にも、大なり小なりそういった感情を包み隠さずに浮かべるものが数人いる。

例外は、つまらなそうにむくれているアルシェイラを含み、ニコニコと笑みを浮かべるサヴァリスと珍しく生身で参加しているデルボネ、あとは若干顔を青くしておどおどしているリーヴァス位だ。

ちなみにシンは現在、女王陛下の命令（という名の脅し）によりグレンダンの町へと散歩に繰り出している。当分は戻ってくる事が無いだろう。

「第一に、奴は汚染獣ですぞ！　いつ都市に危険をもたらすかもしれない存在をここに置いておくなど、もってのほかです！」

「俺も今回はカルヴァーンのおっさんに賛成だ。いくらなんでも博打が過ぎるぜ」

「うむ、確かにカルヴァーンの言う通りじゃ」
「……………」

香水のにおいをブンブン漂わせるトロイアットと年長者のディグリスが同意を示す。その左隣に座っていたカナリスも静かに頷く。きつと例外以外の者たちもカルヴァーンの意見に賛成しているあるう。

当然の反応だ。

汚染獣は人類を捕食し都市を破壊する、つまりは敵だ。これは人類すべてに共通することであり、常識だ。いくら姿形が同じで、人と同じ言語を喋り、人を助けていようと汚染獣であることには変わらない。その敵をわざわざ都市の中に入れている時点で異例中の異例だが、仲間にしようとはまで考える人間はそうそういないだろう。

「都市に被害を及ぼす前に、今すぐ！ あの汚染獣を始末すべきです！」

「えー、別にいいじゃない。丁度一席空いてることだし、そこに入れば天剣授受者全員揃うじゃない」

「天剣授受者を決めるのは遊びではないのですぞ！！」

もつともな言い分だ。

天剣授受者の称号はグレンダンにおいてかなりの意味を持つ。さらに天剣授受者になれば地位や待遇も保証される。なにより、最強の称号を手に入れることは武芸者にとって何よりもかえがたいことだ。それを勢いで決めてしまうのは我がままというものだ。

（じゃあどうすれば認めるってのよ？）

アルシェイラは考える。

女王の特権を振りかざして押し切るということもできるが、それでは納得しないものが多いだろう。反逆を起こすようなものはいないと思うが、これはあまりいい方法ではないだろう。だからといってシンを手放すことはあまりにも惜し過ぎる。

ほんの少し前に一人の天剣授受者が入り、抜けた。正確には抜けたのではなく、この都市から追い出された。だからこそ、その代わりともなるほどの力を持ったシンの存在は無視することができない。無論、単純な力だけでなくその存在自体もだ。

アルシェイラを睨みつけながらガミガミと言うカルヴァーンを無

視しながら、しばらく考えるとふと思いついた。

（なんだ、良い方法あるじゃない♪）

むくれた顔を一变、いかにも面白いことを考えました、みたいな笑みを浮かべる。

このとき天剣授受者のほとんどが、

『あ、またなんか変なこと考えてるなこの陛下』

と思ったそうな。ちなみに町に出ていたシンの背筋に変な怖気が走ったことは誰も知るはずが無い。

アルシェイラが考えたこと、それはあまりに単純なことだった。

「ならば、カルヴァーン。こうすればあなたも納得いくんじゃないかしら？」

「なんですと？」

「だからね———」

アルシェイラの出したあまりに単純明快な提案に、一同が目をもむき、半ば納得した。そして天剣授受者たちの反応に満足したアルシェイラは、満足げな笑みを浮かべた。

敵、それは僕らのすぐ近くにいる

「まったく、なんだっていきなり追い出されねきゃいかなーんだよ
バカ陛下」

アルシェイラたちが王宮で話し合いをしているとき、俺は半ば追
い出されるような形で町にいた。

さすがに街を歩くとなると竜人や竜の形態で行くことは即死を意
味していたため、ちゃんとした人の形態。服装も前のように襷褌切
れ一枚、なんてことなくちゃんとした服装で町に出ている。下手な
格好して捕まったら、何があるかわかりやしないからな。注意する
に越したことはない。

「にしても……」

小声で一人愚痴りながら、周囲に目を向ける。そして、少し戸惑
う。

町に出てすぐから、なぜだかは分からないが人の視線が物凄くこ
ちらに集中していることが分かる。仮にも今の今まで食うか食われ
る環境で生きてきた俺だ。こういった類のものはすぐにでも分かっ
てしまう。

視線が敵対するような色を含んだ視線なら、いくらでも対処のし
ようがある。視線の主を捜して理由を聞くなり、最悪ひと気のない
場所で戦闘をおっ始めるなんて手もあるが……今回ののはまるで違っ
た。視線の主も見てすぐに分かった。

「なんか、やけに女性に見られているような……」

そう、視線のほぼ大半が女性からの何やら熱っぽい視線だった。

残りの少数は子供からの無垢で興味しんしんといった視線だ。

それはそうとはて、俺はなぜこんなにも女性から見られているのだろう。首をひねって考えてみるが、この都市で変なことをした記憶はないし——ていうか拉致状態だったから町に来るのはこれが初めて——だからといって今何か目立つようなことをしているわけでもない。ただ普通に歩いているだけ。それ以外何をしているわけでもない。

何をどー考えても、こんなに視線を集める理由が分からない。

首が回るんじゃないかと思うほどひねりながら考えていたその時。

「——はあ、めんど」

まっすぐ進んでいた足を止め、方向転換。なるべく人気が無い場所へと急ぐ。

路地裏をぐんぐんと進んでいくと、人気は徐々に薄れていく。それと一緒に、自分で自分の目つきが陰しくなっていくのがよく分かった。

当たり前だ。あいつらはいつもこうだ。人ができるだけ平穏と平和を望んでいるのに、ちよくちよく出てきては俺の平穏と平和を邪魔してくる。それが何よりも腹が立つ。ゴキブリみたいに湧いて出てくるあの糞どもが。

完全の人气が無くなった路地裏をいらつきを隠さずにダカダカと進む。いるのは、俺だけだ。

「——とつと出てきやがれ!!」

ギツと何も無い空間を睨む。

「ほお、やはり気付いていたか」

「さすがは『イレギュラー』」

「本来この世界に存在すべきでない者よ」

さっきまで人がまったくいなかった場所から、次々とオオカミを模った面をつけ、同じ戦闘服を身に付けた奇妙な集団が出てくる。発する声は、同じ声、同じ口調で淡々としている。けっして一人だけが話しているわけじゃない。ここにいる奴らが順番に話しているのだ。

「久しぶりじゃねえか。なあ、狼面衆ども！」

狼面衆。この世界を破壊しようと企む存在『イグナシス』の意思のもとに行動をしている奴らだ。

俺はかつて、この世界に来て間もないころにこいつらの襲撃にあったことがある。その頃の俺はまだまだ世界に順応できておらず、力も未熟。そんな状態で襲われた俺は苦戦を強いられが、何とか倒すことができた。

その時から悟った。俺もまた、イグナシスにとって邪魔な存在ではないということ。そしてこいつらは、俺にとって害以外の何物でもないということも。

「今回も俺の排除が目的か？ まったく、俺一人放っておいたって何も変わりゃしないだろおが」

「それは貴様が何もしなければの話だ」

狼面衆の一人が武器を構えながら言う。

「貴様はすでにこの世界の運命に干渉した」

「出会うはずのないものたちが出会う」

「死ぬべきものが生きている」

「貴様は干渉しすぎた。故に消えなければいけない」

狼面衆全員が、カタールやいびつな形をした剣などを構える。
俺も右手から炎を召喚し、無造作にそれを払う。伸びた炎が形を
なしていき、俺の手に一振りの緋炎の槍が形成される。

「……やっぱ、てめーらは許せねえな」

あいつらの言うとおり、俺は干渉をしすぎた。そのせいでこの世
界の運命は大きく変わることになってしまっただろう。だが俺が救っ
た、二人の小さな命。今を懸命に生きようと、必死になり、この世
界の不条理と戦うその命を侮辱した。

こいつらをブチ殺す理由は、それだけで充分だ。
緋炎の切っ先を狼面衆たちへと据える。

「来いよ。お前らまとめて、今ここで消し炭にしてやるよ!!」

「笑止。消えるのは貴様だ」

次の瞬間、爆発的な闘気と怒りが炎へと姿を変え、狼面衆へ向け
て放った。

敵、それは僕らのすぐ近くにいる（後書き）

いろいろとくたばりそこないです。

夏はやはり、私にとって天敵のようでした。

お知らせ

ここ最近書かれた感想に「人型になるようになってしまった、つまらない」などの意見が出てきていて、作者のガラスのハートが割れる寸前です。

というわけで、いつそ人型になる部分を全部消してしまい最初から書きなおす方法か、

それとももう一つのほうで人型にならずに進む物語を書くかを考えています。

作者としては書きなおしてしまう方が楽ですが、ここはやはり読者のみなさんに意見を聞いた方がいいと思うのでここに書きました。これを見てくれた方は、どちらがいいか、もしくはこれ以外の方法があるならばご一報ください。

勿論、この状態の進んでほしいという意見でもいいです。ご協力よろしくお願いいたします。

またお知らせ

皆さまからの暖かいメッセージ。私の心にとっても響き、ガラスのハートがやっと元通りになってきました。

まさかこれほどたくさんのメッセージをもらえるとは思ってもなく、お心の優しい読者様に見守られていると思うと、感動で涙が出ました。

メッセージを読ませてもらった限りでは、このままでもいいという意見が多かったですが、私はいろいろと考えました。

その結果、IFストーリーも書いていこうと思いました。

設定は、主人公はそのままだけでこちらのように人型になることもなく、ついで人の言葉も喋れない状態でどのように生きていくか、みたいな感じの作品を書こうと思っていますが……どうでしょうか？

これもまた、皆さんの意見を聞きたいと思います。こんな感じの事も入れた方が面白くなる、などのアイデアがもし御有りかつお暇があれば、この愚かでお馬鹿な作者にメッセージをお願いいたします。

恐縮ですが今回は感想ではなく、メッセージボックスのほうにお願いいたします。

敵、それは討ち滅ぼすべきもの（前書き）

作者は対人戦闘の描写が苦手な人間です。そして今回は3人称です。

そして励ましてくれた皆さま。ありがとうございました。

作者のかんがえたIFストーリーの件は、当分考えてみようという結果になりました。今はこの作品に力を注ぎたいと思います。

こんなクソ以下カス以下ホコリ以下の駄文でもよければ、今後よろしくお願いいたします。

敵、それは討ち滅ぼすべきもの

シンの力から形成された槍は、万物を時に焼き尽くし、時に溶かし尽くす、荒ぶる業火を閉じ込めた緋炎の武器。

「どんな敵だろうと、貫いてやるさ」

シンが武器にこの形を選んだのは、己の信念を貫き通す、という一種の意思の表れ。業火の力は、邪魔するもの全てを焼き、消し、灰塵と化するために生まれた力。

だからこそ……。

路地裏に佇むシンの前に立ちはだかつていた狼面衆が、一斉に動き出す。

「てめえらまとめて、消し炭にしてやるよ!!」

シンが、爆発するように吠えた。

ドッ！ と。一瞬にして爆発するように踏み込み、狼面衆の一人に肉薄する。

狼面衆も只者ではない。瞬時に反応し、剄の光を纏ったカタールをシン目掛けて振り下ろす。シンはそれを眼中にもないと言いたげに、防ごうともしなかった。

結果、シンの左腕にカタールの刃が深々と突き立つ。そのまま鋸のように引けば、肉が抉られ、骨は削り取られるだろう。だが、そうはさせなかった。引くより早く、右手に持った槍が狼面衆の腹に吸い込まれるように突き立てる。

瞬き一つ、それだけの時間で狼面衆の身体が内側から発火し、絶叫することも許さず、灰も残さず消えていく

その結末を視界の端に捉えながら、シンは鮮血の滴る左腕に目も向けず次なる敵に注意を向ける。と同時に構えていた槍を逆手に構える。

「おらあつ！！ 受け取れえつ！！」

そしてシンは槍投げのように全力で投擲した。

元々が汚染獣と言うこともあり、並の武者とそう大差ない筋力とシン自身が前へと進む勢いを槍に乗せ、さらに投擲の瞬間に槍の柄に手の平に生み出した炎の爆発力を上乘せさせる。

あらゆる力が加算された緋炎の槍は、流星のように火を散らしながら狼面衆へと飛ぶ。

朱色の流星が、射線上にいた二体の狼面衆——一体は顔面の半分を吹き飛ばされ、もう一体は脇腹に槍の先端が喰らい付き、勢いのまま壁に貼り付けになる。

脇腹に槍が突き立った状態で壁に貼り付け。人間であれば痛みにも絶叫するか、ショックで死に至るほどの状態。だが死に恐怖を感じることもない狼面衆にとってはどうと言うことはないようだ。狼面衆は脇腹の槍をさして気にすることなく、引き抜こうと槍の柄を掴もうと手を伸ばす。

だがそれより早く、影が落ちる。

狼面衆が顔を上げる刹那、深紅に染まった右手の突きが容赦なく仮面を粉碎し、その先にある顔面を貫いた。

超高温の手刀が顔面に突き立ち、焼きながら血しぶきと脳が後頭部から吹き出し、壁を真っ赤に染めるのが容易に想像できた。

だがそうなることはなく、突きの形のまま引き抜いた右腕は血に濡れることなく、壁に縫いとめられていた狼面衆もいつの間にか消えていた。

残るのは砕いた仮面の破片のみだ。

ならば中身はどこへ行った？

だがそんな事を悠長に考えさせてくれるほど、敵は甘くない。

突如、背中の肉を喰いちぎられるような痛みと頭の芯まで来るような熱さが来た。

残っていた何体かの狼面衆の武器で背中の肉を抉り取られたのだと脳が理解した瞬間には、シンはその痛みにくらえながらも槍のしなりを存分に生かし、空高くへと飛ぶ。骨まで抉られていれば、回避もままならなかっただろう。

シンにとって人の形態は長所も多い分、短所も多いものである。巨大な体に比べればエネルギー変換効率は格段にこちらのほうが上ではあるが、汚染獣の時に比べれば明らかに肉体の耐久性は低く、汚染獣形態の時には切り傷程度の攻撃も、人の形態の場合は致命傷になりえるからだ。

下を見れば、壁を蹴りこちらへと追撃をかけようとする狼面衆の姿。

やらせるか。

宙に浮かびながらさもそう言いたげな表情をシンが浮かべ、力を注ぎこんだ右腕を狼面衆に向けて十字に薙ぐ。

『紅蓮』局所集中系・『業火剣乱』

瞬間、振り下ろした腕の軌跡をなぞるように炎が出現し、十字の炎が空中に生まれる。その瞬間に、勝敗は決した。

十字の炎から拳大の鋭い剣のような火が吐きだされ、その全てが狼面衆たちのみに向けて落ちていく。炎の滝とも表現できそうなそれは追撃をかけようとしていた狼面衆たちの身体を、貫き、斬り裂き、焼き、地面に落していく。

数十秒間降り続けた炎は次第に小さくなっていき、最後にはスッと消えていった。

後には、何も残ることはなかった。

シンは地面に降り立つと、小走りでその場を後にする。今の戦闘

で近くにいる武芸者たちが騒ぎに気付いたとしたら、色々と面倒なことになることは火を見るより明らかだ。

ふと、自身が傷ついていることを思い出す。汚染獣としての期間が長かったせいだろう。傷や痛みに対してかなり無頓着となっていた。

無事な右手に炎を出し、左腕と背中当たりの傷をほんの少し躊躇しながらも焼いて塞ぐ。そして、少しでも悲鳴を上げた。

傷を負った時より焼いてふさぐほうが何倍もいたいことに気付いたシンは、今後人型の時は戦闘方法をもうちよつと考えようと頭の片隅で思った。

ふいに、ぐらりと視界が歪む。まるで魚眼レンズを通して世界を見たように、目の前のものがグニャグニャと歪み、現実味を無くしていく。予想以上に力を使いすぎ、血も流しすぎたのだと、今になって分かった。

そのまま倒れるように壁に背をつけ、ズルズルと脛と一緒に視界も下がっていく。

思わず、苦笑した。生前は普通だと思っていたこの身体が、こんなにも不便で、不自由で、脆いものだとは分かる瞬間が、まさか自身が化物になってからだとはな、と。

化物なんだから、少し寝ればすぐに回復するだろう。そんな確証もないことを考えつつ、遅い来る睡魔に自らの意識を放り投げることに決めた。

睡魔が完全にシンの意識を乗っ取る、その最後に、

「あゝ……腹減った」

そう言い、完全に意識を闇の中へと手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6557m/>

鋼殻のレギオス 今日から汚染Life♪

2011年9月12日23時07分発行